
遊戲王GX二次創作小説 現実 GXモノ（現在無題）

Y B F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX一次創作小説 現実 GXモノ（現在無題）

【Zコード】

Z0243U

【作者名】

YBF

【あらすじ】

少年、玄咲楓は気づいたら遊戯王GXの世界にいた。原因は不明。持っているのはこの世界における自分の存在を証明する学生証と、愛用するデッキ。目前で行われているのはデュエル・アカデミア 入学試験（実技）。

楽しければそれでよし、という信念のもと、玄咲楓は遊戯王GXの世界に入していく。

TURN -01 超常現象発生！ いきなりのトコホルー（前書き）

見切り発車です。じつも、YBFです。
気晴らしに書いたものなので、クオリティは低いかもしれませんのが、
よろしくお願いします。

TURN -01 超常現象発生！ いきなりのパニック！

目が覚めると、見覚えのあるシルエットが目の前で闖っていた。炎を吐くドリゴン。ひ弱そうな骸骨。どれもが現実味の無いシルエット。

だが、それはどことなくリアルで、生きているようにも見えた。が、同時に生き物ではないとも感じられ、僕 玄咲 くろさきかえで 楓は困惑した。

僕は確か、大学受験に向けて勉強し受験を翌日に控えていた。だから、いつもよりも早く寝た。それくらいしかいつも生活との相違点はないはずだ。

にも関わらず、なぜこいつもいきなり見覚えの無いところにいるのだろう。そして、なぜ見覚えのあるシルエットが闖っているのか。そのシルエットを僕は確かに見た事がある。だが、それは一次元での話だ。

とりあえず、一言で言つてしまえば、だ。

遊戯王OCGのモンスターが、なぜ立体化してるのでどうか。

その一言で死んでしまう。

炎を吐くドリゴンは『メテオドリゴン』だぶりっこ、骸骨はどこから見ても『ワイト』。

そのモンスターの傍らには、『デュエルディスクを装着した学生と、スーツ姿の大人。

よく目を凝らして見ると、アニメで見た気がするシルエットを持つ学生もいた。どことなく空気な感じの。

……このシーンを、見た事がある。

そう。

遊戯王デュエルモンスターZGX第一話。
デュエルアカデミア入学試験（実技試験）だ。

まさか、ネットでよく見た、トリップ系オリ主にでもなったというのだろうか。

それで、ここは遊戯王GXの世界、という事なのだろうか。
そこまで推測を立てた時、左腕に何かを着けている感じがした。
見てみると、自分の左腕にもデュエルディスクが装着されていた。
…それを観察していると、デッキが入っていた。

つまり、コレが僕のデッキなのだろうか。

自分の愛用していたデッキは【闇ドラゴン】と【ライトロード】、
それと闇ドラゴンから派生レッドアイズ・ブラックドラゴン と、いうよりも改悪（改良ではない）
した【真紅眼の黒竜】の亞種。

どれもこれも世界に何枚しかないカードだが、そういうのは入
っていないはずだ。

デッキをパラパラと確認すると、どうやら二つ目の【真紅眼の黒
竜】亞種デッキだったようだ。だが、キーカードである『レッドア
イズ・ダークネスマタルドラゴン』がない。

……何これ。ふざけてるの……？

まあ、原因は恐らくメインキャラクターであるダークネス状態の
天上院吹雪が使用しており、かつ効果がアニメとのOCGで大きく違
う事、だろうか。

アニメだと『真紅眼の闇竜』『レッドアイズ・ダークネスマタル
ゴン』の効果を引き継ぎ、かつ、メタルと名の付いたモンスター
らしい効果を持っていた。

だが、OCGでは手札及び墓地のドラゴン族モンスターを一体特
殊召喚できる効果となり、ダークネスもメタルも関係なくなっつい
る。が、それによつて生まれたデッキが【闇ドラゴン】だ。

高攻撃力のドラゴン族モンスターを『トレード・イン』や『未来融合・フューチャー・フュージョン』などで墓地に落とし、特殊召喚が容易な『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』を場に出し、効果で墓地に落としたモンスターを場に並べる。

比較的容易に高攻撃力のモンスターを何体も場に出す事による一斉攻撃。

これが決まるとき最高に楽しい。

だけど、僕が求めたのはそれよりも上のロマン。

原作を読んでいて一番気に入ったモンスター、それは『真紅眼の黒竜』だ。

それを活躍させるにはどうすればいいか。考えた結果が、【闇ドラゴン】に『真紅眼の黒竜』や『レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン』までぶち込んだ、一種のファンデッキだ。

【ライトロード】や【闇ドラゴン】とは違い、自分で一から考えたデッキ。勝率は三つの中でも一番低いものの、一番気に入っている。それに、『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』さえあれば、ある程度は勝てる。そう思っていたのだが。

……ない、ってどうなのよ。いや、うん。仕方がないのかも知れないけれども……。

とりあえず、なぜかは知らないが持っていたカバンを漁ると、【ライトロード】もあつたし、【真紅眼の黒竜】を強化できそうなカードも何枚か入っていた。

どうなるかはわからない。

だけど、折角のトリップなんだ。楽しまなければ損だらう。

僕は『真紅眼の黒竜』が好きでこのデッキを組んだ。

ならば、このデッキでがんばっていくしかないだろつ。……多分。

だが、懸念材料は【真紅眼の黒竜】亞種デッキは、カードを見る

限り、非常に事故率が高いのだ。

某所での対戦で何度も使ったときは、不思議と手札事故しなかつたのだが、次こそ事故するかもしれない。

胸元を見ると、1-1と書かれた札。

どうやら、僕の学力は1-1番相当らしい。……と、いう事はマー・イ・ロード確定、だらうか

く受験番号1-0番から20番の受験生はテコモル場へ

でもまあ、実技次第だらうけど。

とりあえず、先ほど見つけたカードの中から何枚かをデッキに入れ、デッキから何枚かをカバンに入れる。

これである程度、本来の【真紅眼の黒竜】亞種デッキに戻った。まあ、完璧とは言わないものの、俺の望んだロマンがそこには詰まっている。

わあ、行こう。楽しむために。

……まあ、内心はかなりビビってるんだけどね！？

ソリシドジジョン、遠くから見ても十分怖いんですけどー！？

超常現象発生！　いきなりのデュエル！

そんなこんなで、移動中にどうにか精神統一。

うん、目を瞑るのは精神統一には役立つ。

まあ、デュエル場に向かうのに大分苦戦してしまったが、まあ、
とても遅れたわけじゃないから、大丈夫だろ？。多分。

そして、目の前にはサングラスをかけた大人。どうやら彼が試験官らしい。

それにもモブ臭がする。

いや、実際にそうなのかもしけないが　今、この瞬間にそんなものは関係ない。

「受験番号11、玄咲楓。よろしくお願ひします」

「これより試験デュエルを開始する！」

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP4000
試験官 LP4000

何事もノリが大切。僕も叫んでみた。……さて、と。手札は……

！？

……これは……もしかしたら、後攻ワンキルいけるか……？

「先攻は私だ！ ドローー！ 『重装武者ベン・ケイ』を攻撃表示で召喚！ さらに『デーモンの斧』を一枚装備する。」これで『重装武者ベン・ケイ』の攻撃力は2500となり、バトルフェイズ中三回の攻撃を可能とする！」

重装武者ベン・ケイ

ATK500 DEF800

ATK500 ATK2500

田の前の『重装武者ベン・ケイ』が両手に『デーモンの斧』を装備し、叫んでいる。

うわー。凄くリアルんですけど。これがソリッドビジョンか。どう考へてもオーバーテクノロジーですよね、コレ。あまりにリアルでビックリなんだが。

と、いうよりも、目の前にいるとなるとかなり怖い。遊戯王を知らなかつたら、もつとビビつていいはず。

「カードを一枚伏せ、ターンハンド！ わあ、君のターンだ！」

『重装武者ベン・ケイ』に『デーモンの斧』……まさか、【ベン・ケイ1キル】だらうか。『デーモンの斧』のおかげで攻撃力は2000を越え、その上で三回攻撃。

コレ、本当に試験用の『ナツキ』だらうか。

マッチ戦のないネットの某所だと禁止カードにもされる『重装武者ベン・ケイ』だからな。実技試験は一度のデュエルで判断するらしいし、どう考へても試験用じやない気がする。

それに、先ほどから「あのバカ！ 試験用デッキを使えといった
だろ？」とか、「あの受験生、終わったな」などという声が聞
こえる。

え。マジで試験用デッキ使つてないの、目の前の人。ヤバくね？

……まあ、いいや。

この手札ならソイツ相手でも後攻ワンキルくらい、（謎のチート的なドローのおかげだが）できそうだ。向こうの手札にあるのが『冥府の使者ゴーズ』だと、『クリボー』だと、『バトルフェードー』でない限りは、だが。

まあ、『冥府の使者ゴーズ』や『クリボー』はこの世界だと相当なレアカードのはず。『バトルフェーダー』は5D-Sが初出だったはず。故に、今はないだろ？

つまり。このデュエルは、僕のワンキルで全てが終わる。

「僕のターン！ ドロー！」

ドローしたカードを一応確認する。……うん、コイツがなくともワンキルはできそうだ。

「僕は手札の『真紅眼の黒竜』を墓地に送り、『ダーク・グレファー』を攻撃表示で特殊召喚する！」

ダーク・グレファー

ATK1700 DEF1600

『真紅眼の黒竜』を試験官に見せ、それを墓地に送る。

観客席からは驚きの声が上がっているのがわかった。確かに、この世界では『真紅眼の黒竜』は何十万もあるレアカードだ。……ス

データスはともかくとして。

だが、世界に何枚しかない、というカードでもない。メインキャラクターの一人、天上院吹雪も使用しているとは言え、これくらいなら大丈夫だろう。

……と、いうか。

さつきから、『『真紅眼の黒竜』を墓地に送る？ コイツはバカか！？』なんて声が聞こえるんだが。

バカはお前だ！

わざわざ『真紅眼の黒竜』を手札から通常召喚する機会なんてそういうそりゃないつての！ いやマジで！

「さらに『ダーク・グレファー』の効果発動！ 手札の『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送り、『テッキからもう一枚の『真紅眼の黒竜』を墓地に送る！』

さて、と。これで下ごしらえは完了。本番はここからだ。

「そして、手札から通常魔法『思い出のブラン』を発動！ 自分の墓地に存在する通常モンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、エンドフェイズにそのモンスターは破壊される。僕は『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

目の前に現れたのは、黒い翼を持つ天使。どことなく禍々しいが、どことなく幼く、可愛らしい感じがする。元のカードが『デュミナス・ヴァルキリア』だしな。

このカードも十分アイドルカードに分類されるだろうな。まあ、今は関係ない。それよりも、一応説明を入れるべきだろうか。デュアルモンスターの。

「『ダーク・ヴァルキリア』は効果モンスター。しかし、フィールド及び墓地では通常モンスターとして扱う。よつて『思い出のブランク』の効果の対象となる！」

デュアルモンスター。

フィールド上及び墓地で通常モンスターとして扱われるこのモンスターカードは非常に使い勝手がいい。

通常モンスター専用のカードが使える、というのは便利だ。『思い出のブランク』や『黙する死者』、『戦線復活の代償』などの効果の対象になるし。

「そして、装備魔法『スペルヴィス』発動！『ダーク・ヴァルキリア』に装備！そして、『ダーク・ヴァルキリア』は再召喚された事になり、効果モンスターとして扱われる！」
さて、と。ショータイムはこれからだ。

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！一度だけこのカードに魔力カウンターを載せ、一つにつき攻撃力を300ポイント上げる！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 ATK2100

「だが、それでも攻撃力は2100ポイントだ。私の『重装武者ベン・ケイ』の攻撃力は2500……まだ400足りないぞ？」

「戦闘での破壊は無理でも、効果では可能！『ダーク・ヴァルキリア』のもう一つの効果を発動！カウンターを一つ取り除く事でフィールド上のモンスター一体破壊する事ができる。カウンターを一つ取り除き、『重装武者ベン・ケイ』を破壊する！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK2100 ATK1800

これで試験官のフィールドはリバースカードのみ。だが、このカードで破壊すれば

「さらに、手札から速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動！ このカードは自分と相手フィールド上の魔法・罠カードを一枚ずつ破壊する。自分フィールド上の『スーパーペルヴィス』と先生のリバースカードを破壊！」

赤と黄色。色違いの大竜巻が発生し、『スーパーペルヴィス』とリバースカードを破壊して消える。リバースカードは『聖なるバリア・ミラーフォース』か。……なんというか、定番だな……。

つて、おい。さつきから「自分の装備カードを破壊する？ バカじゃないの？」なんて声が聞こえるんですけど。バカはお前だ！

「そして、破壊され墓地に送られた『スーパーペルヴィス』の効果発動！」

『スーパーペルヴィス』は、墓地に送られた時こそ、本当の性能を發揮するカード。

「墓地に存在する通常モンスターを一体選択し、特殊召喚する事ができる！」

「何！ 君の墓地には……！？ まさか……！」

「そのまさかですよ。僕は墓地から通常モンスター『真紅眼の黒竜』を特殊召喚するつー！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

テンションが上がってきた。

ネットの某所でよく用いたコンボ。『スーパーペルヴィス』を装備した『ダーク・ヴァルキリア』で相手モンスターを排除してからの『

ダブル・サイクロン』。

そして、『真紅眼の黒竜』の特殊召喚。
わざわざ生け贋召喚する必要はない。

むしろ、この方法で特殊召喚する方がかつこいいに決まつてゐる。

『真紅眼の黒竜』が目の前に現れ、咆哮した。

黒一色に、真紅の眼。

その姿に目はぐきづけになる。

が、まだデュエルは終わっていない。

まあ、既に勝敗は決したような氣もするが。

さきほどから「バカか！？」なんて発言が聞こえていたのだが、『真紅眼の黒竜』がフィールド上に現れた事により、黙つたようだ。

と、いうよりも「すげえ」とか「そうか、そのために……」なんて声が聞こえてくる。

うん。やはり予想通り。遊戯王の世界よりも現実世界の方がレベルが高そうだ。まあ、壊れ性能なアニメオリジナルカードなんものが相手だと苦戦しそうだけども。

とりあえず、今はそんな事よりもこのデュエルを終わらせる事が先だ。

「バトルフェイズ！　『ダーク・グレファー』、『ダーク・ヴァルキリア』、『真紅眼の黒竜』でダイレクトアタック！」

まず、『ダーク・グレファー』が試験官を右手に持つた剣で切り払い、『ダーク・ヴァルキリア』は手から純白の奔流を放ち、『真紅眼の黒竜』は黒炎を吐き出す。

つて、ちょっと待つた。『ダーク・ヴァルキリア』の攻撃が純白の奔流、だと？　“ダーク”と名がつくなら漆黒の奔流の方が似合いそうなんだが。

……あ。そう言えばアニメ遊戯王デュエルモンスターズの『デュナス・ヴァルキリア』の攻撃は漆黒の奔流だつたつけ？……純白と漆黒、闇属性と光属性で対比してるので？ だとすれば、納得がいくが。

まあ、そんな考察はともかく。

試験官は「ぐわああつ！！」と叫んで吹き飛ばされる。あれ？ ソリッドビジョンだよね、コレ。そんなにヤバいの？ いや、アニメ通りだけども。衝撃も再現するんですか、ソリッドビジョンって……。

そう考えると、さらにも怖いんですけど。……ダメージ受けたくない……。

……ま、まあ、それはともかくとして。

攻撃力1700、1800、2400の三対による攻撃。合計5900ダメージ。

うーん。OCGだと全然だめだな。まだ2100削る必要がある。だが、アニメではライフポイントは4000だから、1900ポイントのオーバーキルとなる。うん、予想通り、後攻ワンキル達成。デュエルが僕の勝利で終わつた事で、ソリッドビジョンで映し出されたモンスターたちが消えてゆく。

『ダーク・グレファー』、『真紅眼の黒竜』の順で消えてゆき、『ダーク・ヴァルキリア』が最後に消えていった。

玄咲楓 KP4000
試験官 LPO (1900のオーバーキル)

「なかなかの実力だ。これで受験番号111の試験、デュエルを終了する

「ありがとうございました」

一礼して、デュエル場を去る。とりあえず、礼儀は大事だしな。

とりあえず、これからどうじょうか。

ここにトリップしたはいいが、住所とか金とかどうなっているのだろうか。……カバンの中を漁れば見つかるだろうか。

カード以外のものを物色する。

……あれ。銀行通帳とか入ってり。うわ、中学の学生証もある。お、これで住所も完璧……ん？ 待った。

名前は現実と同じ。住所も現実と同じらしい。……つまり、遊戯王の世界での僕に憑依した、という形だろうか。それも、中学時代の。

とりあえず、トイレに向かい鏡を見てみると、そこには数年前の僕の顔があった。

女顔で悩んだ頃そのままだ。くそ、だからどうみても“男の娘”じゃねえか

と、いうのはおいておぐが、どうやら、僕の仮説は正しかったらしい。

とは言つても。童実野町つて……どちら辺なんだろつか。どうやつて家に帰るのだろうか。とりあえず、カバンを漁つた時に見つけたノートパソコンで調べればいいのだろうか。

まあ、うん。それはおいおい調べればいいか。

今はとりあえず、会場に戻つて遊戯王デュエルモンスターズGXの主人公、十代のデュエルを待つことの方が先決かな。生で見てみたいしね。

そう思つて、僕はトイレを出て、観客席へと向かつ。

これから僕がどうなるのかは知らない。でも、少しくらい楽しんだって罰はないはずだ。

僕は少しだけ早歩きで観客席に向かった。

なんか、よくよく考えたら、かなりの『都合主義』だよな、これ……

なんて事を、少し考えながら。
いや、普通そう思つよね？

まあ、それはともかくとして、僕は観客席に戻るのだった

To be continued

おまけ

「本日の最強カードは『スペルヴィス』だ。デュアルモンスターを再召喚した状態にできるついで、墓地に送られた時、墓地の通常モンスターを一体、特殊召喚する事ができるぞ……」

「……なんか、見切り発車過ぎないか、これ……」

TURN - 01 超常現象発生！ いきなりのトヨエル！（後書き）

誤字または脱字、そして「トヨエル」における「ス」などがあれば、指摘して貰いたるとありがとうございます。

では、以上、YBFでした。

2011・6・14 誤字訂正

TURN-02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア（前書き）

実はある程度までストックがあります。
……が、訂正を入れながらの投稿、かつ執筆時間不足により、更新
は不定期になるかと。
できる限り定期的に更新できるようにがんばります。

YBF

TURN - 02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア

あれから数週間。ついに「デュエルアカデミア」の地を僕は踏む。結局、僕はトリップしたまま。戻る手がかりはなし。なら、楽しむしかない。と、結論付けている。

と、いうか、だ。その後、カバンの中から自分の財布を見つけ、その中に異様なほど金が入っていた。

よつて、帰りはタクシーを見つけ、学生証に書かれた住所までと運転手に言つて、自宅に辿り着いた。

自宅周辺はどうも現実とそう変わり映えはなかつた。

とはいえる、現実世界とは大きく違うのは、普通に「デュエルモンスター」ズが流行していることだろうか。

うん、だつてさ、そこらかしこの公園で、プレイヤマットを敷いて子供達が「デュエル！」って叫んでいるし。

俺の知つている地元じゃ流石にここまで熱狂的に流行してなかつたよ。遊戯王。

閑話休題。

そんなこんなで、帰宅した僕は自室に戻ると、これまた何枚かのカードを入手。これも「デッキ補強用」に使う事にして、今日を迎えた。巨大なヘリで「デュエルアカデミア」のある南の島に運ばれ、そして、僕は黄色の制服の袖を通した。

予想通りとは言え……なんか、空気になりそうな色だ。

まあ、楽しめるのであれば、という但し書きはつくるものの、空気で構わない。某王子風に言えば、「空気で構わんがな」かな。ニコアソスが違すぎるが。

まあ、とりあえず、だ。

楽しむために、色々と奔走するかな。

TURN - 02

プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア

試験の結果、僕はラー・イエローに所属する事になつたらしい。テンプレの場合は基本的にオシリス・レッドのような気がするのだが、僕はどうやらテンプレではなかつたらしい。……なんか、代わりに空気になりそうだけど。まあ、それは放置しておく。

ラー・イエロー寮の自室は一人部屋だったが、イエローの生徒がちょうど奇数だったためか、僕は一人だった。……まあ、その方がのんびりできるから、ちょうどいいのだが。

カバンの中に詰め込んだカードを部屋の押入れに収納する。デッキ補強を使う可能性があるとはいっても、しばらくは自宅で弄ったデッ

キでやつていく事にする。

さて、と。現在時刻は午後六時。新入生の歓迎会は午後七時。確かに、アニメ第一話のイベントは歓迎会直前と歓迎会後の深夜だったはず。

「デュエル場の場所は生徒全員配布のPDAで調べる事ができるから、一応、行ける。よし、介入しよう。面白そうだし。

とりあえず、荷物の整理を終えた僕は部屋を出る。すると、廊下には後の空氣である試験番号1番がいた。

「ええと、確か名前は……。ダメだ思い出せない」と、思つていると、向こうから話し掛けってきた。

「君は……試験で後攻ワンターンキルをした受験番号11番……だったっけ？」

「ああ、僕が受験番号11番、玄咲楓だけど……君は？ 受験番号1番なのは覚えているんだけど……」

「お、そうだった。名前を聞く時はまず自分から、だつたな。俺は三沢大地。みさわ だいち君のデュエル、よかつたよ。君とならいいデュエルができそうだしね」

「そりゃどうも。勿論、負ける気は一切ないけどな」

いいデュエル つまり、自分が負けるわけがないという自信があるからこそこの宣言だろう。

だけど、僕だって負けるつもりはない。……と、いうか三沢さん。確かに、アニメだと相手のアンチデッキを組むデュエリストだったようだ。

そりや、負けるわけがないか。……不運さえなければ、という但書きこじつくけれど。

「ま、そうだよな。負けるつもりでデュエルなんて、いつちも『メ

ンだ

「そりゃ当然だろ。じゃ、僕は少し校内探索しようと思つてるから」「わかつた。歓迎会は午後七時だから気をつけろよ」「そのくらい、わかつてるって」

僕は三沢に別れを告げ、デュエル場へと向かつ。道中、不思議と誰にも会う事無く、そのままデュエル場に辿り着き、「ビーグワイヤット」と誰かが言つた。記憶が確かなら、その台詞を言つたのは

「諸君、はしゃぐな
「万丈目さん……」

オベリスク・ブルーの制服に身を包んだ三人の男子生徒と、オシリス・レッドの制服を着た二人の男子生徒。間違いない。
後にサンダーと呼ばれるネタキヤラとなる万丈目準まんじょうじゅんとその取り巻きまき一名、そして主人公である遊城十代ゆうきじゅうだいとその子分、丸藤翔まるふじしょう……間違いない。アニメ第一話の状況とあまりにも類似している。よし、突入だ。

「ソイツ、お前達よりも
「ああ、そうだな。オベリスク・ブルーのプライドにすがりつくテメエら三人よりも強いよな」

原作介入の始まりだぜえ！ メ ツュエニユエル！！
あ。いけね。テンションが上がりすぎた。
まあ、いいや。

「 なんだと……！？」
「中等部から生え抜き？ バカバカしい。そもそも、ブルーだから強いなんて事はないだろ？ 強いやつが強い。当然の話だろ？」

「お前！ 万丈目さんになんて口をおつ！」

「そうだ！ ラー・イエローの分際で！」

「……そうか。やけに調子に乗っているなと思えば、実技試験で試験官に後攻ワントーンキルをした男と、手加減されてたとはいえるノス教諭を倒した男か。」

「実力さ」

十代が拳を握り締めながらそう答える。

うん、僕はどうしよう。まあ、いいやアレは流石に手札がよかつただけだし。とはいっても、ここから程度に負けるような僕ではないと言い切れる。だからこそ、無言で万丈目を睨む。

そんな十代の言葉を聞き、僕の様子を見て、万丈目は鼻で笑う。

「その実力、ここに見せて欲しいもんだな」

「いいぜ」

「別に構わないけど？」

とりあえず、挑発しまくる。この頃の万丈目は何もかもが微妙だしな。しかも、オベリスク・ブルーのプライドにすがりつく馬鹿野郎だ。

この時点なら、僕はいくらでも彼とその取り巻きを挑発しまくる。そんな事を考えていると、「あなた達。何してるの？」と、女性の声が聞こえた。

うん、アニメどおりだ。今、ここに来たのは

「ああ、キレイな人……」

「天上院くん。いやあ、この新入りがあまりに世間知らずなんでねえ。学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思つて」

遊戯王GXのヒロインの一人。天上院明日香。中等部からの生え抜きで、GXのメインキャラクターに定着するくらいの実力の持ち

てんじょういろいあすか

主。……あまり強いイメージがないけど。

それにしても、美女だな。明日香は。ただ、美少女ではないのが残念である。自分のストライクゾーンからは少し外れてる。

……まあ、どうでもいいけど。フラグなんて立てないし、立つはずもないし。

「そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ

「引き上げるぞ」

明日香のその一言で撤退する万丈目。

……うん、この頃から万丈目は明日香に對して恋心を抱いていたのだろうか。

まあ、どうでもいいか。

「あなたたち。万丈目君の挑発に乗らない事ね。あいつら、ろくでもない連中なんだから……っ！」

うわ。怖い。なにその顔。まじ怖いんですけど。

……つてのは[冗談だが]……うん、確かに怖い。よっぽど嫌われているんだな万丈目。こりや、万丈目の恋は成就するわけないなさて、時計を確認して、と。つお、午後六時四十五分か。……そろそろ寮に戻るべきか。

「とりあえず……そろそろ僕らも寮に戻つて歓迎会に参加するべきかな。あ、自己紹介がまだだな。僕は玄咲楓。よろしく！」

「俺は遊城十代。よろしくな！」

「ボクは丸藤翔ツス

「天上院明日香よ」

本当に軽い自己紹介。それだけを済まし、僕はラー・イエローの寮へ戻り、歓迎会に参加した。

歓迎会が終わったその夜。

突如PDAが鳴り出し、メールを受信した事を僕に知らせる。何でこっちのアドレスを知ってるのか。と、いう疑問はあるが、関係ない。

さて、行こう。デュエル場へ。
僕が楽しむために。

デュエル場の前で十代と翔を合流し、中に入る。そこには万丈目とその取り巻きが待ち構えていた。

「よく来たな110番に11番」

「へへっ、デュエルと聞いちゃ来ない理由はないぜ」

「そのプライドをぶち壊してやろうと思つてね……っ」

僕の趣味の一つは、自信満々で他人を見下すムカつくヤツを思つ存分やつづける事だ。

そして、僕と十代は歩を進める。

翔はそんな十代を止めようとするも、今更止まる十代ではない。勿論、僕が十代の立場でも止まるつもりはない。

どうやら、今夜のデュエルは十代×5万丈目と僕×5取り巻き（メガネをかけてない方）の同時進行らしい。

……同時進行で。まあ、いいけどさ。

「お前の実力はオベリスク・ブルーでは通用しないと教えてやるー」

しかも、向こうは向こうで凄くテンション上がっているし。

こういう人を見ると、なぜか萎えるんだよな。さつきまでテンション上がっていたはずなのに。

うーん。熱くなつた人を見ると、逆に冷めてくるのって、よくある現象な気がする。

まあ、いいや。

「あ、そ。それじゃあ、がんばれば？」

「ハッ！ そんな態度でいられるのもいまのうちだぞ！ アンティ

ルールだからな。俺が勝つたらお前の『真紅眼の黒竜』は俺のものだ！」

まあ、レアカードである『真紅眼の黒竜』が欲しいのはわかるけどさ。そんなに欲しいのかよ。

ステータス見ればわかるだろ。そこまで凄くないんだから。ロマンはあるけど。

まあ、ロマンだけで『テック』に入れている僕が言えることじゃないけど。

と、いつか勝手に勝利宣言しないでほしい。そういうヤツを見ると結構イラッて来るし。

「だんまりか？ は！ 泣いて謝るなら今のうちだぞ？ ま、その代わり『真紅眼の黒竜』は俺のものだけなー！」

やべえ、何このジャイアリズム。結構ビハビヤない。

かなりイラつて来たんだけど。

……もういい。目の前のヤツはぶつ潰す。

「勝手に言つてろ。とつとと始めて『メヘ』に早く絶望をみせてやる

よ

「お前え……ッ！ 減らざ口をおッ……！ デュエル！」

「……デュエル」

玄咲楓 LP4000

取り巻き LP4000

「先攻はイエロー！ てめえに譲つてやるよー。」

正直、後攻の方が個人的に好きなのだが……。

だが、今回の初期手札はワンキルできそうなものではない。ここは大人しく、先攻で行くとしよう。

「ドロー」

「うーむ。どうも攻め手に欠く。

相手をぶつ潰すは決定なのだが、この手札で潰すのは無理かな……。

「僕はモンスターをセット、カードを2枚伏せて、ターンエンド
「どうした？ 攻めてこないのか？ ならばいつから攻めるぞ….
ドロー…」

なんか、勝手にどんどんテンションが上がってないか？
……とりあえず。コイツのデッキはなんだろう。取り巻きつて要是モブキャラなわけだし、そんなに強いデッキではなそうだが。

「俺は『ゴブリンヒーロー部隊』を攻撃表示で召喚…」

ゴブリンヒーロー部隊

ATK2200 DEF1500

うおーい。コイツ、自分がヒーローとでも思つてゐるのか？
いや、思ひ込んでそうだな。しかも、ゴブリンって。攻撃後に守備表示になるし。

まあ、どうでもいいか。

田の前に現れる鎧を装着したゴブリンたち。なんだかシユールだ。
うん。似合つてねえみ……。

「そりゃー…『一重召喚』^{トロアルサモン}を発動。この効果によつ、もう一度通常召喚を行える！ 僕はもう一枚の『ゴブリンヒーロー部隊』を召喚する…」

「わあ。アニメでは見るけど実際の『デッキ』にはなかなか入らない『一重召喚』来たー。

まあ、【デュアル】だと再召喚に使えるから入る可能性はあるけどさあ。

ふと鱗を見ると、万丈目が『ヘル・ポリマー』を発動していた。

うん、このタイミングで天上院が来たから……タイムリミットが迫ってきてる、って事か。

……それまでに終わらせてプライドをへし折つてやる。

「まずは、お前のその恥まわしいモンスターを消し去つてやる！一枚目の『ゴブリンエリート部隊』でそのセットモンスターを攻撃！」

ゴブリンが統制のとれた動きを見せ、セットモンスターへと迫る。

仮面竜

ATK1400 DEF1200

「セットモンスターは『アスクド・ドラゴン仮面竜』だ」

伏せられていたカードが開き、『仮面竜』が姿を現す。だが、目の前に迫ってきた『ゴブリンエリート部隊』に気づいて防御姿勢をとるも、すぐに破壊される。

「破壊され、墓地に送られた『仮面竜』の効果発動。デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する。僕はもう一枚目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」

「ち、小瀬な真似を……！」一枚目の『ゴブリンエリート部隊』で

『仮面竜』を再び攻撃！』

再び迫り来る統率がとれたゴブリンたち。為す術もなく『仮面竜』は破壊される。

『『仮面竜』の効果。デッキから再び『仮面竜』を特殊召喚する』
「ち、ライフケイントは削れなかつたか……。『ゴブリンエリート部隊』は攻撃終了後、守備表示となる！ カードを一枚伏せて、ターンハンド！』

どうやら、向こうは苛々しているらしい。さて、と。そろそろ仕上げと参りますか。

「僕のターン、ドロー」

「この瞬間、リバースカードオープン！」

いきなり、取り巻きが叫んだ。

場にいるのは守備表示となつた『ゴブリンエリート部隊』といふ事はまさか。

『戦力カード』最終突撃命令『発動！』

やつぱりか。このカードの効果で守備表示モンスターは攻撃表示となる。攻撃力は高いが守備力が高くないゴブリンシリーズのサポートカードとなる永続罠。

まあ、そんなのがあつた所で、今引けたカードを見る限り、僕がそのまま勝てそうだ。

つて、翔。『え？ 『最終突撃命令』？』と首を傾げるなよ。『最終突撃命令』くらい知つとけよ。

「ハハハ！ これで俺の『ゴブリンエリート部隊』は再び攻撃表示

となる！ 攻撃力2200の『ゴブリンエリート部隊』を倒すには、お前の『真紅眼の黒竜』しかないよなあ？ テメエの雑魚モンスターじゃ、俺に勝てないんだよ！

雑魚、だと？

「コイツはバカだ。アホだ。

僕のカードを全然わかつちゃいない。

「壁モンスターの『仮面竜』も攻撃表示となつちゃ、テメエのライフも、もうすぐゼロで、『真紅眼の黒竜』もすぐ俺の物になる！ テメエみたいな女男が持つてていいレアカードじゃあねえんだよお！」

「」

今、コイツは言つてはいけない事を言つた。

女男、だと……！？

は、そっちがそのつもりなら、本当にへし折つてやる。

……ああ、もう。中一病過ぎなにようにがんばってきたけど、こうなつたらもういい。

潰すことだけを考える。

それに、僕のことを“女男”と呼んだやつは、現実世界にいた頃の話ではあるが、例外なく、ぶちのめしたからな。それは、こっちでも例外ではない……！！

「通常魔法『闇の誘惑』発動。カードを一枚ドローし、手札の闇属性モンスターを一枚除外する。闇属性モンスターがいなければ手札をすべて捨てる。一枚ドロー。手札の『ダーク・ヴァルキリア』を除外」

「ハ！ 雑魚モンスターをコストに手札補充か。確かに、雑魚にはその程度しか使い道はねえよなあ！？」

無視だ。

「…………手札から装備魔法『D・D・R』^{ディファーダムモンジダバル}を発動。除外されているモンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。『闇の誘惑』で除外した『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

目の前に現れる『ダーク・ヴァルキリア』。

どことなく、相手プレイヤーである取り巻きを睨みつけているよう見える。まあ、雑魚呼ばわりされたんだから、仕方がない気がするが。

「装備魔法『スーパールヴィス』発動。これで『ダーク・ヴァルキリア』は効果モンスターとなり、魔力カウンターを一つ載せる」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 ATK2100

「だが、攻撃力は2100！『ゴブリンエリート部隊には届かない！残念だったな！」

「残念なのはお前だ。リバースカードオープン、永続罠『漆黒のパワーストーン』を発動。このカードに魔力カウンターを三つ載せ、一ターンに一度、魔力カウンターを他のカードに載せかえる。『ダークヴァルキリア』に載せる」

「……な、こ、攻撃力2400だと！？」

「さらに、もう一枚のリバースカードもオープン。こいつも『漆黒のパワーストーン』だ。魔力カウンターを一つ、『ダーク・ヴァルキリア』に載せる」

ダーク・ヴァルキリア

ATK2100 ATK2700

これにより、『ダーク・ヴァルキリア』の攻撃力は2700となつたが……注目するべきはそこではない。

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果。魔力カウンターを一つ取り除き、モンスター一体を破壊する。僕は二つ取り除き、『ゴブリンエリート部隊』二体を破壊する」

すると、『ダーク・ヴァルキリア』から純白の奔流が放たれ、それが『ゴブリンエリート部隊』を包み、『ゴブリンエリート部隊』は一体とも粉々に砕け散った。

ダーク・ヴァルキリア

ATK2700 ATK2100

「あ、ああつ……俺のフィールドがガラ空きだと……！？　い、いや、だが俺のライフは4000もある。一体の攻撃をくらつても、俺のライフは残る！　体勢を整えれば、この程度！」

「何勘違いしているんだ？」

「はあ！？」

「僕は通常召喚を行っていない。僕は手札から『サファイアドラゴン』を通常召喚！」

サファイアドラゴン

ATK1900 DEF1600

攻撃力1900のドラゴン族通常モンスター。『ダーク・ヴァルキリア』と『サファイアドラゴン』のダイレクトアタックでちょうどライフはゼロだ。

「『ダーク・ヴァルキリア』と『サファイアドラゴン』でダイレクトアタック！ テメエが雑魚と罵つたモンスターの攻撃を食らえー！」
「ひいっ！？」

恐怖に染まる取り巻き。だが、僕は攻撃をやめない。

『サファイアドラゴン』は頑丈そうな爪で取り巻きを切り裂き、『ダーク・ヴァルキリア』はやつぱりというかなんというか純白の奔流で取り巻きを包み込む。

目の前には悲鳴を上げる取り巻き。……ふう、満足した。それにしても……ソリッヂビジョン、過激だな。

なんか、僕の感情を汲み取つて、空氣を読んだ演出をしてくれている感じがする。……うーん。どうこう仕組みなんだろ？

玄咲楓 LP4000

取り巻き LP0

てか、『漆黒のパワーストーン』を遊び心でデッキに入れてみたのだが、それがこうも活躍するとは思わなかつたな。

普通なら、使う機会を失つて、手札で腐るはずなのだが。

「お前の負けだよ、ブルー。アンティは受け取らないでおくよ。一応、禁止されているしね」

「チツ……テメエ、よくもあ……っ……」

取り巻きは凄い形相でコツチを睨んでいる。うん、つーか、そんな事している暇が合つたらカードの性能をちゃんと把握しろよ。全く。

そんな事を思つてみると、「ガーディアンが来るわー」という明日香の声がデュエル場に響き渡る。

「万丈目さんヤバいっすよ！」

「今夜はここまでだ。俺の勝ちは預けておいてやる」「まだ勝負は終わっちゃいないぜ！」

そして、隣ではアニメどおりの展開。

万丈目がデュエル場を去つてからも、十代は動こうとしない。おいおい、アンティールールや夜間の施設使用は校則違反、つまり退学の危機だつてのに。

結局、全員でデュエル場から撤退する事ができた。

翔だけで十代を動かすのは難しいと思い、僕も協力した。取り巻きに“女男”と言われるくらい僕の顔は女顔で、身長も低い”男の娘”ではあるが、一応、筋力には自信がある方だ。一人がかりでなら、十代を動かすのは苦じゃない。

「全く、世話のかかる人ね」

「ちえ、余計な事を」

デュエルが中断してしまったのがそんなに嫌だったのか、十代の機嫌は悪い。

「ありがとう明日香さん。それと、楓君もありがとうッス。ボク一人だとアーチキを運べなかつたかもしれないし」「気にするな」

あれ？でも、そう言えばアニメだと翔だけで十代を動かしていたような。

……どうでもいいか。

「どう。オベリスク・ブルーの洗礼を受けた感想は？」

「ただのプライドにすがりついた雑魚だな。あの取り巻きが特別弱かつた可能性もあるけど、な」

「まあまあかな。もう少しやるかと思つたけどね」

自信満々な様子の十代。そりやそうだろう。起死回生の一枚が、最後のドローで手札に加わったのだから。

「そうかしら？ 玄咲くんはともかくとして、あなたは邪魔が入つてなかつたら、今頃アンティルールで大事なカードを失う所じゃなかつたの？」

だが、それを知らない明日香はそうとしか言えない。十代のライフポイントは残り550で、手札は一枚。よほどの事がない限り、次のターンを持ちこたえる事はできない。

しかし、十代にはできた。

「いや、あのデュエル、俺の勝ちだぜ」

そう言つて十代は明日香に一つのカードを見せ付ける。

『死者蘇生』。墓地のモンスターを特殊召喚する魔法カード。

それで、『E・HERO フレイムウイングマン』を特殊召喚し、攻撃すれば十代の勝ち。

OCGでは“融合召喚でしか特殊召喚できない”とテキストにあるため不可能だが、こっちではそうではない。よつて、あのデュエルは十代の勝ちなのだ。

それに気づいた明日香は息を呑む。

その様子を見て満足したのか、十代はその場から去る。それに気づいた翔は「あ、アニキー」と呼びかけながら追いかける。残されたのは、僕と明日香。

「それじゃ、僕も帰るよ。そろそろ寝て明日の最初の授業に備えた方がよさそうだしね」

「そうね。また明日。玄咲くん」

「おひ、またな明日香」

それにしても。十代を見る明日香の田が思いつきフラグ臭がしだんすけど。

うーむ。主人公と言つのはチートドローだけでなく、フラグ体质も持つものなのか。

……僕には関係のない話だな。

そんな事を考えながら、僕は寮に戻った。

To be continued

おまけ

「今回の最強カードは『ダーク・ヴァルキリア』だ。再召喚した後、他のカードで魔力カウンターを載せれば、相手フィールド上のモンスターを一掃できるぞ！」

「今回のようにわざわざ『漆黒のパワーストーン』を使ってまで溜めるのはただのロマン」

TURN-02 プライドをぶち壊せ！ ダーク・ヴァルキリア（後書き）

誤字または脱字、そして『テュエル』におけるミスなどがあれば、指摘してくださるとありがとうございます。

追記

2011.9.24

『D・D・R』のルビのミスを修正。

TURN -03 水上決闘!? 楓VSジョンロー

強引にアニメ第一話のイベントに入りしてから数日が経過した。なんとなくではあるものの、ラー・イエローでの生活に慣れてきたような気がする。

通常の授業と「トコホル」の授業。

前者はトリップ前に学習した内容と同一だったため、どうにかなる。つーか、正直楽勝である。

後者は……うん、言わずもがな。トコラブ前の世界じゃ遊戯王カードをやっていれば誰でも知っているような内容ばかりだ。わかつて当然だ。

にも拘らず、丸藤翔……なぜわからない……。あれか？ 前者の方の成績で合格した感じだろうか。

いや、だとしたら十代はもっと謎過ぎる。結構頭がよくないキャラクターとして描かれているし、カードの効果を知らない事が多いのに。

いや、あれか？ 四択問題で偶然の正解が結構多かつたからか？ 一人ともなかなかにチートドローを見せ付けるときがあるし……うん、思い当たる節はそれくらいしかないな……。

閑話休題。

ところで。鍊金術の授業って、何なんだろう。いや、聞いていて面白いと言えば面白いんだけど、何に役立てればよのだろうか。それが一番の謎？

何はともあれ。そんな日常に慣れてきたからか、アニメの事も徐々に忘れつつある最近。

イベントは、忘れた頃にやってくる。

すぐ間近に迫っているイベントの事を忘れて、明日の授業の準備

がてら制服からパジャマ（もとい、半袖短パン）に着替えようとした、その時だった。

PDAが急に鳴り出した。

あれ。万丈田のイベントは終わらせたあと、そんなイベントあつたっけか。

……ああ、思い出した。丸藤翔誘拐事件か。うわあ、どうでもいい。でも、行かないと後日何か言われそうだなあ。と、いうよりもむしろ、イベント介入の貴重なチャンスだ。逃すわけにはいかない。

とりあえず、その記憶で間違つてないかを確かめるために、PDAを開いて確認する。

『丸藤翔を預かっている。返して欲しくば女子寮に来られたし』
それにしても、非通知かつ声も加工つて……。どうやつたらできるんだろうか。確かに明日香が十代と一緒に戦えたいから呼び出したのだから、実行犯も明日香のはず。

……優等生だから色々教えてもらつていいのだろうか。まあ、今はどうでもいい。

とりあえず、イベントに参加するために僕は制服に着替えなおし、デッキだけを持って行く事にした。

女子寮の湖に前に着いたのは、同じ音声メールを受け取ったはずの十代とほぼ同時だつた。

「楓！ お前も呼び出されたのか？」

「そうだよ。……これを漕いで女子寮に行く、って事か……？」

湖にはボートが浮かんでいた。うん、アニメでも確か うん、ボートで十代が女子寮に行つていったような気がする。

「おっし、楓！ 翔を助けるために一緒に行くぞ！」

「オッケー。呼び出されたのは僕も十代も同じだしな」

そして、十代と僕は一緒にボートを漕いで、女子寮の前になんとか辿り着いた。

そこにいたのは、翔と、それを確保している女子二名と天上院明日香だつた。

確かに、女子二名の名前は そう、枕田ジュンコと浜口ももえ、だつたか。

「翔！ コレばどういう事なんだよ？」

「それが、話せば長いよつな、長くないよつな」

「コイツがね、女子寮のお風呂を覗いたのよ」

「なんだつて？」

「覗いてないつて！」

「……翔、よっぽど欲求不満だったのか？」

「違うつて！」

ちょっとからかおうと思つて言つてみる。うん、やつぱり否定してきた。

まあ、僕が同じ立場であれば、否定するだらうし、当然といえば

当然なのだけれど。

「コレが学校にバレたら、きっと退学ですわ」
アニメを見る限り、翔はそこまで辿り着けていないのだが。うん、可能な所まであともう数メートルだよな。アウトだよな。その時点で。まあ、退学はやりすぎな気がする。

まあ、心情としては退学にしたいのかかもしれないが。まあ、凄くどうでもいい。僕にとつては。

「ねえ、あなたたち。私たちとデュエルしない？」

“たち”。アニメには僕はいないから、その分、追加したのだろう。

うん、この流れだと僕もデュエルする事になりそうだ。トリップ物の定番もあるし。

「もし私たちに勝つたら、風呂場覗きの件は大目に見てあげるわ」「だから覗いてないって言つてるのに！」

「なんだかよくわからないけど、まあいいやー。そのデュエル、受けて立つぜ！」

で、十代は勿論デュエルとなればそれに乗る。僕は翔の退学なんてどうでもいいがイベント介入的にはデュエルしたいし、勝負に乗るとする。

とりあえず、確認だけは済ませよう。

「あなた“たち”って言つた事は、僕もデュエルするという事ですよね？」

「ええ。そのつもりよ。……そうね。私たちは三人、あなたたちも

三人。一本先取のチーム戦はどう？」

「例え負けたとしても、退学は翔だけですよね？」

「……そうね。あなた達一人は私たちが呼んだだけだし

「ええ？！ そんな！？」

「わかりました」

確認は済んだ。とりあえず、デュエルディスクを一台貸してもらい、初戦を担当する十代がそれを装着し、僕がボートを漕いで、湖

の上で「デュエルが始まった。

なんで、湖の上にしたし。地上でいいじゃん。と、思ったが
口に出さない事にした。

「…………そして、相手プレイヤーに「ダイレクト」アタックだ！　“ボル
ティック・サンダー”！」

巨大な人型モンスターでE・HEROの一種、『E・HERO
サンダー・ジャイアント』が十代の相手プレイヤー、明日香にダイレ
クトアタックを決め、アニメどおり十代は明日香に勝利した。

これで、一本先取。さて、二戦目は僕が行く事にしよう。

「いいデュエルだつたな」

「おう、次は楓、翔の為にも次で決めてやれ！」

「可能ならね。まあ、負ける気なんてさらさらないんだけどや」

僕はそういうて十代と位置を交換。船の先頭に立つ。

相手は枕田ジュン。

……なんか、どこかの一次創作で読んだ気がする。……気にしな
い事にする。

それにしても、向こうはとてもなく臨戦態勢である。そんなに
覗きが嫌いなのか。いや、覗きが嫌いじゃない女子って少数派だと
思つけれどもさ。と、いうかいるの？

「さつさと構えなさいよ！」

「りょーかい、つーか苛々しないほうがいいんじゃないの？　翔を

退学にするには僕に勝たなきゃいけないわけだしさ」

「それを言つならアイツを退学にしたくないなら、私に勝たなきゃ
いけないのよ？」

「む。これは平行線になりそうだ。

「じゃ、始めるとしよう」

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓 LP4000

枕田ジュンゴ LP4000

ほぼ同時に叫び、カードを五枚ドロー。そして、先攻は相手
枕田ジュンゴだ。

確か、アニメでは『マーメイド・ナイト』を使用していたため【
水属性】だろうと推測できるにも関わらず、タッグフォースでは【
ハーピィレディ】を使用していたんだったか。

正直な話、普段は伏せカードを多用しない自分からすれば、前者
でも後者でも構わない。まあ、どちらかといえば前者の方が楽かも
しれないが。

「アタシのターン！ ドロー！ 『マーメイド・ナイト』を攻撃表
示で召喚！ もうにフィールド魔法『海』を発動！ これで『マー
メイド・ナイト』の攻撃力は1700になり、一ターンに二度の攻
撃が可能になるわ！」

マーメイド・ナイト

ATK1500 ATK1700

DEF700 DEF900

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

『マーメイド・ナイト』を場に出した、という事は普通に『海』
と水族モンスターを使つたビートデッキだろう。これで、【ハーピ
ィレディ】の線は消えた。

正直、ただのビートデッキならばこちらに分がある。と、いうか
『海』よりも『伝説の都 アトランティス』の方がヤバい気がする。
水属性モンスターのレベルが下がることで、主要のロックカード
『グラヴィティ・バインド・超重力の網』や『レベル制限B地区』

をすり抜けて攻撃してくるからだ。

コッチの主軸はレベル4以上の『ダーク・ヴァルキリア』や『ダーク・グレファー』。レベル4以上のモンスターを対象とするロックカードは鬼門なのだ。

だけど、今回、枕田が使用しているのは『海』。『テッキにそもそもも『海』しかないのか、それともそこまで考えていなか。はたまた『伝説の都 アトランティス』を持つてないのか。

まあ、判断材料が少なすぎるので、じつくりと考えていく事にしよう。

「僕のターン、ドロー！」

さて、と。今回の初期手札は正直当たりではない。ここは、リクリューターである『仮面竜』で防御とテッキ圧縮をするしかないだろう。

「モンスターをセット、カード一枚伏せて、ターンエンド」「何もしてこないの！？ だったらアタシから攻めさせてもらわわ！ アタシのターン、ドロー！」『マーメイド・ナイト』を攻撃表示で召喚！

マーメイド・ナイト

ATK1500 DEF700

ATK1500 DEF1700
DEF700 DEF900

一体田の『マーメイド・ナイト』。『海』がフィールド上にあることで二回攻撃が二体分。つまり、合計で四階攻撃となる。ライフポイントが4000しかないアニメの世界では、結構恐ろしい状態だ。

と、いうか今がその状態だ。

僕のデッキにはリクルーターは『仮面竜』三枚のみ。『仮面竜』の効果の対象になるカードは『ボマー・ドラゴン』と『黒竜の雛

のみ。

だが、戦闘によって自身を破壊したモンスターを破壊するといつ優秀な効果を持つ『ボマー・ドラゴン』は一枚とも手札。つまり、この状況では特殊召喚できない。くそ、デッキ圧縮は高速で進むけど、リクルーターをこんなに早く使い切るだなんて……！

「バトル！『マーメイド・ナイト』でセットモンスターに攻撃！」

「セットモンスターは『仮面竜』！ デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族、二体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚する！」

仮面竜

ATK1400 DEF1200

「ち、面倒な……！『マーメイド・ナイト』の一回目の攻撃！」

「『仮面竜』の効果、二体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚！」「でも、四枚目はないでしょ！？ 一体目の『マーメイド・ナイト』の攻撃！」

「『仮面竜』の効果で『黒竜の雛』を守備表示で召喚する！」

黒竜の雛

ATK800 DEF500

『真紅眼の黒竜』を小さくしたような、小型の竜。

「一体目の『マーメイド・ナイト』、一回目の攻撃！」

「だが、竜と言えどまだ雛。『マーメイド・ナイト』の攻撃にあつけなく破壊される。」

「これでアンタのフィールドはガラ空きよ。次のターンで終わらせてあげるわ！」

……いや、そんな事言われても。

まあ、いいや。今はドローするのみだ。

「僕のターン、ドロー！」

ドローしたカードは……。ん、待てよ。リバースカードを使えば

……！

「リバースカードオープン！ 永続罠『リビングデッジの呼び声！』
発動！」

「でもアンタの墓地には攻撃力の低い『仮面竜』と『黒竜の雛』し
かいないじゃない！」

「まあ、見てればわかるつての！ 『黒竜の雛』を特殊召喚し、『
黒竜の雛』の効果を使う！」

「『黒竜の雛』の効果！？ そんな小さい竜に何ができるつての！
？」

「おいおい。仮にもレアカードのサポートカードなのに……。まあ、
いいや。今の僕のテンションは有頂天、カードの効果を説明してや
る……！」

「『黒竜の雛』の効果。このカードを墓地に送る事で、手札から『
真紅眼の黒竜』一体を特殊召喚する……！」

「なんですって！？」

「来い！ 『真紅眼の黒竜』！」

テンションの上がった僕は右手を大きく手を上げる。そして、そ
れとタイミングを合わせたように『真紅眼の黒竜』が目の前に現
れた。

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「！」これが……『真紅眼の黒竜』……！？」

「さらに、手札から通常魔法『闇の誘惑』を発動！ 一枚ドローし
て闇属性モンスター『ダーク・ヴァルキリア』を除外、そして装備
魔法『D・D・R』を発動！ 手札を一枚捨てて、さつき除外した
『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

田の前に現れる黒翼の少女、『ダーク・ヴァルキリア』。『真紅眼の黒竜』とともに相手プレイヤーである枕田ジュンに『プレッシヤー』を与える。

「そして、装備魔法『スープル・ヴィス』を発動、『ダーク・ヴァルキリア』に装備して『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！ 魔力カウンターを載せ、それを取り除く事で『マーメイド・ナイト』一体破壊！」

これで、枕田の場合は『マーメイド・ナイト』一体。手札のカードにもよるが、恐らく懸念しているカードはない。この勝負、もうひとつ……！

「そして、手札から『ボマー・ドラゴン』を攻撃表示で通常召喚…」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

爆弾を抱えた青いドラゴン。それが僕の目の前に現れる。さあ、行こう！

「バトル！ 『ボマー・ドラゴン』で『マーメイド・ナイト』を攻撃！」

「間違ったわね。攻撃力1000のモンスターで攻撃力1700の『マーメイド・ナイト』を攻撃するなんて！」

『ボマー・ドラゴン』の効果。このカードが戦闘によって破壊され墓地に送れた時、このカードを破壊したモンスターを破壊する。そして、このカードが攻撃した場合、お互いのプレイヤーが受ける戦闘ダメージはゼロになる……！

「……そ、そんな！？ と、いう事は……！？」

『マーメイド・ナイト』は『ボマー・ドラゴン』の効果により破

壊される！

それにしても、ヤバいな。テンショングが上がりすぎだ。……ああ、もういい。中二病満載かもしれないが、このテンションのまま突つ切つてやる！

……ああ、そうだ。せっかくテンションが上がっているんだ。技名も叫んでやるうじやないか！

「行け、『ボマー・ドラゴン』！ “スーサイド・スクスピロージヨン”！」

自爆特攻し、相手を道連れにする。

すまない。『ボマー・ドラゴン』。だが、『ボマー・ドラゴン』

のおかげで

「これで、お前のフィールドはがら空きだ！ このターンで勝負を決める！『ダーク・ヴァルキリア』、『真紅眼の黒竜』でダイレクトアタック！」

攻撃力2400と1800、合計4200ポイントのダメージ。つまり、僕の勝ちだ。

まず『ダーク・ヴァルキリア』の純白の奔流で枕田が悲鳴をあげ、奔流が止んだその瞬間に、『真紅眼の黒竜』がトドメの“黒炎弾”を放つた。

ちょ、『真紅眼の黒竜』！ なんか、この前の『デュエルよりも攻撃がデカくないですか！？ テンションども上がってんのか！？ いや、き、気のせいだよな、うん。

玄咲楓 LP4000

枕田ジュンコ LP0（200のオーバーキル）

とにかく、だ。

僕のトリップ後のデュエルはここまで三戦全勝、どれもがノーダメージと、スタートダッシュに成功したのだった。……うん、どこかで失速しそうだなあ……これ……。

「約束通り翔は連れて帰るぜ」

一本先取した事により、翔は見逃される事となつた。まあ、自分も楽しめて、翔も退学を免れたわけだし、めでたい事だ。

「どうぞ、約束は守るわ。今日のことは黙つてあげる」

「フン！ マグレで勝つたからといって、いい気にならない」とね！」

「よしでジュン口」

「でも明日香さん……」

「負けは負けよ。見苦しいことはしないでね」

それにもしても、明日香はとてもサバサバしてる。うーん。こういう人と勝負したら、勝つても負けてもいい気分になれそうだ。逆に。枕田はなあ……。勝ち方が気持ちかったからまだしも……。「いや、そいつの言うとおりかもしれないぜ。あんたら、強いよ」「でも僕の勝利はマグレじゃないね。信じない、というのなら今度の月一テストで証明してみせるよ」

マグレだと抜かしやがった枕田を睨む。すると、向こうは睨み返してきた。

「じゃあな」

十代がそう言って、ボートを漕いでここを去る。

ふと女子陣の方をもう一度見てみると、枕田がまだ僕のことを睨みつけていた。

今度相対した時には、好敵手になつているんじゃないかな？
なんてらしくない推測を、僕はしてしまつた。

おまけ

「今回の最強カードは『ボマー・ドラゴン』だ。このカードが攻撃した時、戦闘ダメージはゼロになり、このカードを戦闘で破壊したモンスターを破壊するぞ」

「“ボマー”さんの除去おこしいです。いやマジで。」

TURN-03 水上決闘！？ 楓バージョン（後書き）

一ヶ月ぶりです。どうも、YBFです。

とりあえず、こんな感じの更新間隔になります。
そうでもないと、失踪扱いになりうるので。

……執筆時間が欲しいです。

それさえれば、もっと短い間隔で掲載できるはずなので…… TURN

とりあえず。

誤字または脱字、そして「トコエルにおける」などがあれば、指摘して貰うとありがたいです。
では。

TURN - 04 月一試験！ ウィクトーリア（前書き）

一回連続10日に投稿！ デジタル、YBFです。
これなら、TURN - 01もTURN - 02も10日に投稿すれば
よかつたかなあ……。

追記

2011.8.11

ミスがちらほらと指摘されています。未修正のものもあるので、指
摘は感想一覧を見て、重複しないようにお願いします。
また、まだまだ未指摘のものもあるかもしれませんので、ミスがあ
れば指摘よろしくお願いします。

TURN -04 月一試験！ ウィクトーリア

月一試験。筆記と実技の一種のテストを受け、成績優秀者は上の寮に移る事もできる、重要なイベント。

一回目の月一テストに向け、勉強する事にした。

もちろん、筆記はデュエルの知識だけでなく五教科のテストもある。まあ、どうにかなるだろうが。

とりあえず、筆記試験に関しては三沢大地の独壇場な気がする。入学試験でも筆記では一番で、アニメでも序盤は活躍していたはず。『ウォータードラゴン』初登場のあたりまで。

……って、何話だっけ。『ウォータードラゴン』の初登場。序盤だったのは覚えてるのだけど……。まあ、いいや。

とにかく。筆記は三沢大地の独壇場。例えトリップ前に既に学習済みの範囲であろうとも、勝てるとは思えない。そして、実技も力ードの引きにかかるから、安定しない。

……あれ？ 死亡フラグたつてる？ いや、気のせいだろう。うん、そういう事にしよう。

それにして、ラー・イエローだと原作に入りしようとすると結構強引にいかないといけなくなるなあ。

アニメでのイベントに入りして、満足するのが目的だから、その目的さえ果たせるのなら面倒でもがんばるけど、長く続くと考えると少しウソだな……。

まあ、仕方ない。

とりあえず、がんばるしかないだろ？
僕が楽しむために。

TURN · 04
月一試験！ ウィクトーリア

五教科のテストは一日目、デュエルの知識および実技試験は二日目、といつ日程。

「一日目、二日目ともにどうにかなった感じがする。と、いうかデュエルの知識は現実世界で遊戯王OCGをやってさえいれば誰でもわかる問題だった。

そして、アニメどおり二日目のテストの最中に十代が教室に入ってきた、テストを受け取り、そしてすぐさま寝た。何のために来たんだよ、と言いたい。

とりあえず、そんなこんなで筆記試験は終了。三沢が十代たちを起こそうと努力しているみたいだし、俺も介入しようかな、と。

「おい、一人とも！ テストはとっくに終わってたぞ！」

「そうだぞー。つーか、てめえら寝すぎだぞー」

三沢が翔を揺らし、僕が十代を揺らす。先に起きて大きなリアクションをとつたのは翔だった。

「ひあつ！？ やつちまつた……何のために勉強したんだか……」

「気にすんな。実技テストが本番よ」

と、翔の大きなリアクションで起きたのか、十代が急に起きた。

「あれ？ みんなは？」

「もう昼飯か？」

「購買部さ。なんせ、新カードが大量入荷する事になつてゐるからな」

「ああ。そうだな」

「ええ！？ カードの大量入荷！？」

翔は驚き、十代も気になるのか立ち上がつた。

そして、なぜかはしらないが、急に三沢が無駄にかつこいボーズをとつた。

……うーむ。なぜだ？

「みんな、午後の実技テストに向けてデッキを補強しようと買つていつたんだよ」

「三沢君と玄咲君は？」

「ぼくは今のデッキを信頼している。新しいカードなんて必要ない」「僕もだな。それに、カードってのは吟味してデッキに入れるものだからな。あせつて新しいカードを購入しても、デッキに採用できるか一दじやなきや意味がない」

「あ、アーキは？」

「俺は 興味ある！ どんなカードがあるのか見たくつてしまつがねえ！ 行こうぜ、翔！」

「うん！」

そう言つて、十代と翔が購買部へと駆けてゆく。わお。すぐく速い。びっくりするほど速いぞ。

「なあ、僕らはどうする？ カードは買わないにしても、暇だろ？」「そうだな。……まあ、昼飯を買いに食堂に行かないか？ 今なら空いていそうだしな」

「おお、ナイスアイデア三沢。じゃあ、行こうぜ」

そんなこんなで、僕らは食堂に行くことにした。

そして、午後一時。迎えた実技試験。

原則として、同じ寮の生徒とのデュエルのはずなのだが……。

「シニヨール玄咲は入学試験では筆記実技ともに上位、実技にいたつてはワントーンキルと成績優秀。よつて、オベリスク・ブルーの生徒 シニヨール 首藤 しゅとう とデュエルをして、勝てばシニヨール玄咲をオベリスク・ブルーに昇格させる、といふ話になつてゐる」

「ネ！」

と、言われても。

正直、ワントーンキルはただ単に運がよかつただけと言わざるを得ない。つーか、あれはできすぎ。

ロマンの詰め合わせデッキでよく手札が揃つたな、としみじみ思う。

……まあ、それはさておき、だ。

「……お前か。クロノス教諭が気に入っているラー・イエローは」
それよりも、この目の前にいるヤツは、今までの対戦相手とは一癖もふた癖も違ひそうだ。僕の事を見下してはいるけれども、なんとなく、今までのとは、違う。

見下しているのは、自分の実力に自信を持つてゐる。裏づけがある。そういう事だろう。

ならば、今までのよつにほいかない。

油断はできない。念には念を。慎重に、だが怯まずにデュエルをしなければ 負けるかもしれない。

「確かに、お前は入学試験において、教師をワントーンキルで倒した。だが、それは運に過ぎない。……俺の デュエル・アカデミア次席の首藤次郎の計算され尽くしたデッキの前に敗北し、羞を思

「知れラーニエロー……！」

芝居がかつたブルー生徒の声。言つている内容も、その言い方も、中二病。まあ、僕もその氣があるから人の事はいえないのだけど、……」いつやって見ると、痛いな。

「まあ、いい。

「そう思つのは勝手だけど、僕を見下すのは、僕を倒してからにした方がいいんぢやない？ 負けたら、恥ずかしいと思うよ？ そういうの」

とりあえず、こういう自信満々な人間を見ると、そりやつて挑発したくなる。それが、玄咲楓という人間だ。……自分でも、直した方がいいかな、とは思うのだけれど。

でも、こういつた場面では役に立つ。

「言つたな……！？ お前こそ、後悔するなよ……！？」

どうやら、相手は挑発に引っかかつたようだ。ああいう発言をするようなヤツほど、我慢強くはないのだ。となれば、こういう挑発で集中力を欠く、なんて事はザラだ。

……まあ、どこまで通用してくれるかが相手次第、という時点で、あまり使えないんだけどね。挑発。

とにかく、だ。

今はただ、やるしかない。

「デュエル！」
「デュエル！」

玄咲楓 LP4000
首藤次郎 LP4000

「先攻は譲つてやる」

「そりやどうも。僕のターン、ドローー！」

正直、手札はよろしくない。いや、この「テッキ構成にしては、マシな方かもしねえ。とりあえず、後攻ワンキルを狙えるような手札じゃないから、先攻で正解だったかもしねえ。

とりあえず、定石を打とう。まずはそれからだ。

「僕はモンスターをセット！ カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「フン。それだけか。せっかく先攻を譲つてやつたところに。」

「まあ、いい。俺のターン、ドロー！」

僕の行動がそんなに不満だったのか、鼻を鳴らしながら、静かに相手はドローをする。

そして、引いたカードを見て、口元を二ヶ所歪ませる。……どうやら、キーカードを引いたらしい。

さて、何が来る……！？

「俺は手札より『ウイクトーリア』を守備表示で召喚する」

ウイクトーリア

ATK1800 DEF1500

目の前に現れるは、PSPにてゲスト参戦した某機体 げふん
げふん、ではなく 金色の天使。

カードイラストと違って、イラスト下部にあつたドラゴンは、姿を現していない。効果を使用していなかったからいない、という事だろうか。

……いや、それ以前に。

僕のデッキは、基本的には墓地に『真紅眼の黒竜』を落として、それを特殊召喚するという戦術を用いる。

そうする事で、手札には下級モンスター、もしくは魔法・罠カードを来るよつに調整するのだが、『ウイクトーリア』には【ドラゴ

ン族】に対するメタともいえる効果がある。

「ターンに一度、相手の墓地にあるドラゴン族モンスターを自分フィールド上に特殊召喚する

最悪な事に、僕のデッキの現時点での最高打点は『真紅眼の黒竜』の攻撃力2400だ。それ以上の攻撃力を持つモンスターは今、デッキには入っていない。入れていないのだ。
……くそ、迂闊に墓地肥やしもできない。

「墓地肥やしさえしなければ、『ウイクトーリア』の効果で特殊召喚されずに済む そう考えているな？」

「……！？」

「そのくらい、わかつていいわ。だが、今は何もしないでおい!」
カードを2枚伏せて、ターンエンドだ。お前のターンだ
相手は様子見に入つたようだった。

……怖い。

『ウイクトーリア』が場にいる限り、僕は墓地肥やしはそう簡単に出来ない。

「僕のターン、ドロー！」

しかも、手札がかなり事故を起こしている。ここまで事故ったのは久しぶりだ。まあ、こんなよくわからないデッキなのだ。事故を起こして当然だが ここで事故は勘弁だ。

「……このまま、ターンエンドだ」

「そして、俺のターンだ！ ドロー。……フン、これで全てが整つた」

「ヤリ、と首藤が口元をゆがめるのが見えた。……何かを、仕掛けてくる……！」

「通常魔法『闇の指名者』を発動。『真紅眼の黒竜』を手札に加え

てもらおうか

「！？」

予想外だ。まさか、『闇の指名者』などといつカードを使つてくれるとは。

正直、あまりメリットを感じられないこのカード。まさか、ここからハンデスしてくるのだろうか。

「僕のデッキには確かに『真紅眼の黒竜』がある。手札に加えるぞ」
その瞬間、「ブルーがプレイミスだと！？」「オベリスク・ブルーの永遠の一一番手、首藤次郎が、ミスなんてありえない！」などと
いう声が聞こえた。

いや、プレイミスなんかじゃないはずだ。

ハンデスか何かで墓地に落とし、『ウイクトーリア』の効果でコントロールを奪う そうに違いない。

でも、僕には防ぐ手段がない。

「(.)でリバースカードオープン、罠カード『マイイングラッシュ』
！ お前の手札から『真紅眼の黒竜』を捨ててもらおうか

予想通りの展開。でも、それを覆せない……！！

「そして、『ウイクトーリア』の効果を使用する。お前の墓地に存在する『真紅眼の黒竜』を俺の場に特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

頼れるエースモンスター。それが、目の前で、僕と相対して咆哮した。

金色の竜操る天使、『ウイクトーリア』に頭をなでられ、嬉しそうにしている『真紅眼の黒竜』。

……でも、まさかこういう展開があるだなんて……！

「バトル。『真紅眼の黒竜』でセットモンスターに攻撃」

「……セットモンスターは『仮面竜』だ」

仮面竜

ATK1400 DEF1100

「効果により、デッキから一枚目の『仮面竜』を特殊召喚する……！」

「……リクルーターか。面倒だな。コントロールを奪つても、効果で特殊召喚できるのは持ち主であるお前だからな。……ほんと、面倒だ。……ターンエンドだ」

「僕のターン……ドロー！」

駄目だ。まだ手札がよくならない。このままじゃ、状況を開拓できない……！

相手のフィールドには墓地のドラゴン族モンスターを1ターンに1度特殊召喚できる『ウイクトーリア』。

そして、僕のデッキのエースモンスター『真紅眼の黒竜』。この状態で、もう1体の『ウイクトーリア』が現れてしまった場合、状況はさらに悪化するだろう。

「……このまま、ターンエンドだ……！」

「何もできない。このままじゃ、勝てない……！」

「ふん、何も策がないか。……ならば、そのまま負ければいいわ。俺のターン、ドロー。……『真紅眼の黒竜』で『仮面竜』に攻撃』追加のモンスターはなし。手札事故でも起こしたのだろうか。そういうあるとありがたいが。

とりあえず、『真紅眼の黒竜』の攻撃により『仮面竜』は破壊されるが効果によりデッキから更なる『仮面竜』が姿を現す。

「面倒だな……ターンエンド」

「僕のターン、ドロー！……ターンヒンド

「何も引けなかつたか。所詮はイエロー。『デッキ構築もできんか』『デッキ構築自体はできる。ただ、引き運に関してはまだまだ一流なんでね』

「ならば、一一流らしい『デッキにすればいいものを。俺のターン、ドロー。そして、『強欲な壺』を発動し、さらに一枚をドローする

」　「ここで、首藤の動きが一瞬止まった。……何か一瞬迷つているようだ。

「　ここは攻めさせて貰おうか。俺は『真紅眼の黒竜』を生贊に、『光神テテュス』を召喚する！」

目の前から『真紅眼の黒竜』が姿を消し、代わりに現れるは純白の天使。大きな羽も特徴的。頭の上に輪が浮遊していればパークエクト、という感じである。　が、今は関係ない。

光神テテュス

ATK2400 DEF1800

上級モンスター。攻撃力は2400と『真紅眼の黒竜』と然程変わらない。

……だが、それよりも

「だけど、それだけじゃない。『ワイクトーリア』の効果がまだ残っている……！」

「そうだ。『ワイクトーリア』の効果を発動。再び『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する」

再び目の前に現れ、立ちはだかる『真紅眼の黒竜』。

状況は悪い。こうなつてしまつと、次のドローカードが本当に重要なつてくる……！

「バトルだ。『光神テテュス』で『仮面竜』に攻撃！　“ホーリー・サルヴェイション”！」

攻撃力2400のモンスターの前では、守備力1100など無力。

『仮面竜』はその姿を消す。

「ぐ、効果で『ボマー・ドラゴン』を守備表示で特殊召喚するー。」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

『Jのカードを戦闘によつて破壊したモンスターを道連れにする』ボマー・ドラゴン』。伏せカードは残念ながらブラフであるため、壁を出さなければ攻撃力2400と1800の攻撃で敗北が確定してしまう。

『ボマー・ドラゴン』を利用されてしまつ可能性が出てくるが、そつしなければ 負ける。

「……ふん。『真紅眼の黒竜』で『ボマー・ドラゴン』に攻撃し、『ウイクトーリア』でダイレクトアタック！」

「『真紅眼の黒竜』は『ボマー・ドラゴン』の効果で破壊できる。だから、『真紅眼の黒竜』で攻撃なんだろつが」

「ラー・イエローでもその程度はわかるか。……このまま、ターンエンドだ」

玄咲楓 LP2200

状況は芳しくない。Jのドローが全てを握っている。

「僕のターン、ドロー！　－？　僕は『天使の施し』を発動！　三枚ドローし、一枚を捨てる！」

「Jで手札増強か。悪運の持ち主だな」

「悪運でも何でも結構！　さらに、『強欲な壺』を発動し、一枚ドロー！　さらに、『闇の誘惑』を発動し、一枚ドロー。そして、『ダーク・ヴァルキリア』を手札から除外するー」

Jに來ての連續ドロー。

チートドローといわれても仕方がない。

でも、これのおかげで、打開策は見えてきた。

このターンで決める事が出来なければ、向こうは総攻撃を仕掛け
て、そのまま勝利をおさめるだらう。

つまり、実質、僕に残されたターンはこのターンのみ。

でも、もう、僕には勝利への道は見えている。

「――このターンで決めさせてもらう!」

「何!?」

『装備魔法』D・D・R を発動! 手札を一枚捨て、除外してい
る『ダーク・ヴァルキリア』を蘇生する!』

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

漆黒の天使が目の前に現れる。純白の天使とは正反対のその姿。

攻撃力は劣るが 効果は攻撃的だ。

「そして、『ダーク・ヴァルキリア』を再度召喚し、効果を使用す
る! 魔力カウンターを載せ、それを取り除き、『真紅眼の黒竜』
を破壊する!」

自分のモンスターではあるが、仕方がない。……なんとなく申し
訳ない気持ちになるが、破壊される寸前、『真紅眼の黒竜』がうな
ずいているように見えた。

……なんだろう。目でも疲れているのだろうか。いや、今はそれ
よりもデュエルだ。

「そして、手札より魔法カード『思い出のブランコ』を発動! 『
真紅眼の黒竜』を特殊召喚する!』

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「……取り戻した、か。だが、攻撃力は2400

『光神テテユ

ス』と相討ちだぞ？」

「いいや。まだだ。一枚目の『思い出のプラン』を発動し、『ヘルカイザー・ドラゴン』を特殊召喚する！」

「何！？」

ヘルカイザー・ドラゴン

ATK2400 DEF1500

「だ、だが攻撃力は2400だ！ 結局、このターンで俺に与えられるダメージの最大力は1800！ このターンじゃ決められないぞ！（それに、俺の手札には『ライトヒトグ・ボルテックス』と一枚目の『ウイクトーリア』がある。これで勝利は）」

「そして、リバースカードオープン、装備魔法『スペル・ヴィス』！『ヘルカイザー・ドラゴン』に装備する！」

初期の手札には罠カードが一枚もなかつた。だが、カードを一枚も伏せないのはどうしても怖い。だから、伏せていた『スペル・ヴィス』。さつきの連續ドローでなんとか使えるところまで持つてこれた……！

「そして、再度召喚された『ヘルカイザー・ドラゴン』の効果。“このカードは、一度のバトルフェイズ中に2度攻撃する事ができる”……！」

「な、何！？ と、言う事は？！」

「攻撃力2400の『ヘルカイザー・ドラゴン』の一回攻撃でモンスターを一掃、そして、『真紅眼の黒龍』（攻撃力2400）と『ダーク・ヴァルキリア』（攻撃力1800）のダイレクトアタックで、終わりだ」

「な、な……！？」

「まずは『ヘルカイザー・ドラゴン』の一回目の攻撃だ。『ウイクトーリア』に攻撃！ “ヘルカイザー・バースト・ファースト” オー！」

金色の天使が、竜の口から放たれる炎に焼き尽くされる。まずは、一体目。

「そして、一回目の攻撃！『光神テテュス』に攻撃！“ヘルカイザー・バースト・セカンド”オ！」
「ち、“ホーリー・サルヴェイション”！」

純白の天使は炎に焼き尽くされながらも、竜の懷まで迫り、その身体を輝かせた。その光に『ヘルカイザー・ドラゴン』は飲み込まれ、消えてゆく。

すまない、『ヘルカイザー・ドラゴン』と思いつつも、僕の思考は目の前の状況へと向けられる。

これで、相手のフィールドはがら空きだ。

「……まあ、これはほとんど蛇足だが、『スープル・ヴィス』が墓地に送られたから、『ヘルカイザー・ドラゴン』を墓地から特殊召喚するぞ」

そして、再び現れる『ヘルカイザー・ドラゴン』。気のせいいか、咆哮が前よりも弱々しかった。

「さて、と……止めだ。『ダーク・ヴァルキリア』と『真紅眼の黒竜』ついでに、先ほど特殊召喚したばかりの『ヘルカイザー・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

漆黒の天使と黒竜、そして地獄を統べる帝王が同時に攻撃を放つ。純白の奔流と、漆黒の炎弾、そして炎の奔流。

「ぐああああっ！」

そして、相手 首藤の叫び声。……男の叫び声とか、正直興味ないが。まあ、聞こえてきたので列挙しておく。……いや、やつぱ忘れよう。

「そ、そんな……この俺が……、オベリスク・ブルーの俺が……ラ
ー・イエローに負けた……だと……！？」

「オベリスク・ブルーなら強い、ってわけじゃない。強いほうが勝
つ。つまり、そういう事なんだよ」

僕が静かにそう言い放つと、歓声が沸きあがつた。……え？ な
になに？

……まさか、ラー・イエローである僕がオベリスク・ブルーに勝
つたからだろうか。

「かつこいぞ玄咲ー！」

「『真紅眼の黒竜』やっぱりカツコイイ！…」

「『ヘルカイザー・ドラゴン』もカツコイイぞ！ 攻撃力2400
の一回攻撃？ マジパネエっす！」

なんか、すげ盛り上がつてゐる……。

そして、その後。

「万丈目！ これでお互いライフは1000ポイントずつ、で
もここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよ
なあ？」

「何を戯言を！ そう簡単に！」

「でも、引いたら面白いよなあ！ 俺のターン、ドロー！ 俺はこ
のカード、『E・HERO フュザーマン』を召喚しプレイヤーに
ダイレクトアタック！」

結局、十代vs万丈目もアニメどおりの結果に終わつたらしく。

「やつたあ！ やつたぜアニキー！」

隣にいる翔が騒いでいる。うーん。まあ、気持ちはわかるけどさ。

「それにしても、あの引きは凄いな。なあ、三沢

「そうだな。あれだけは計算でどうこういつとうレベルではなもん
だ」

「三沢君、玄咲君！ アニキのところに行こうよ。」

「……そうだな。十代を祝福してやろうか」

「よし、そうと決まれば行くが、翔、三沢！」

そうして、僕らは十代の元へと向かった。

「おーい、おーいアニキー！」

デュエルフィールドに降り、翔は走つて十代の傍へと向かい、僕と三沢はその後から十代の傍に向かう。

〈見せて貰いましたよ遊城十代〉

すると、校長の放送が入った。

〈君のデッキへの信頼感、モンスターとの熱い友情。そして何よりも、勝負を捨てないデュエル魂、それはここにいる全ての者が認めることでしょう。よつて、勝者・遊城君。ラー・イエローに昇格です〉
校長のその言葉を合図にして、「おめでとー！」や「やつたぜ十代ー！」などといつた十代を称えるホールが再び会場中に響き渡つた。

〈そして、玄咲楓〉

「はい？まだ何かあるの？いや……まさか……。

〈遊城君に勝るとも劣らぬデッキへの信頼、カードの効果を最大限に活かす卓越したタクティクス、そして劣勢でも冷静かつ熱いブレイングするデュエル魂。そのどれもが非常にハイレベルなものだという事は、やはり、ここにいる全ての者が認める事でしょう。よつて、玄咲楓君。君はオベリスク・ブルーに昇格です〉

その後、「玄咲君おめでとー！」「さすが楓！」などと歓声が沸きあがる。……つたぐ、こうこつのは僕のガラじやないとこうのに。

「やつたな、玄咲。先を越されてしまつたな」

そう言つたのは、三沢だつた。……筆記試験主席を差し置いてのブルー昇格。三沢からしたら、悔しいことなのかもしけない。それでも、三沢は僕を称えてくれた。

「うん。けど、ま。三沢だつたらすぐブルーに昇格できるだろ？」

「ああ。それくらいの実力は持つてゐるつもりだ」

自信満々の三沢。……うん。がんばってくれ。ついでに空氣にな

らないように努力する必要があるかもしねりが。

……で、その夜。

僕は三沢の部屋にお邪魔していた。

「引越しの準備はしなくていいのか？」

「ああ。結局僕はイエローに残ろうかと思ってね。あの後、今回のデュエルを自主的にレポートにまとめたんだけど、結構、マグレだつてわかつてさ……」

振り返ると、あれはどう考えても引きがよかつたから勝てた、という感じである。

『天使の施し』で『強欲の壺』。『強欲な壺』で『闇の誘惑』を引く。などなど。運任せな部分が多くたし。『ヘルカイザー・ドラゴン』も『天使の施し』の時だ。……あれは手が震えた。

『反省の意味も込めて、昇格は自粛したんだよ。あれは運がよすぎだ。序盤の手札事故を含めても』

「いいのか？ 折角ブルー寮に行けたんだぞ？」

「いや。ちょっと考えることがあってさ」

「なんだ？」

三沢が聞いてくる。うん。思いついたことを言ってみる。

「……下克上、してみないか？」

「下克上、だと？」

「ああ。今の制度だとオベリスク・ブルーが一番上だろ？ でもさ。ラー・イエローでもオベリスク・ブルーに勝てるのだから、これからラー・イエローが何度もオベリスク・ブルーに勝てば、ラー・イエローこそが一番上の寮になつたりしないか？」

そう。

オベリスク・ブルーだから強い、というプライドの持ち主の中にいるよりか、そういうた野心を持つて努力したい、というのが僕の願望だ。

「なるほど、それは面白いな」

「だろ？」

そんなこんな話をしながら、夜は更けてゆく。

To be continued

おまけ

「今回の最強カードは『ヘルカイザー・ドラゴン』だ。再召喚したこのカードは、一度のバトルフェイズに一度攻撃する事ができるぞ！」

「まあ、コイツもロマンの一種だろうか。うん、でもいいよね。二回攻撃つてかっこいいよね。まあ、それだけだけど」

TURN - 04 月一試験！ ウィクトーリア（後書き）

何気に難産だった今回の話。

初期案では、TURN - 02で戦つた取り巻きとの再戦のつもりでした。

が、当時読んでいた某作品とあまりにも似ていた事に、前話の時にやつと気づきました。

で、先月急いで書き直した結果がこれです。

一応、ミスがないようにしているつもりですが、……ちょっと、今は不安です。

とりあえず、今回登場した首藤次郎は今後も脇役としてちょいちょい使っていこうかな、と勝手に思っていたり。

……まあ、メインキャラクターになる事はないと思います。多分。

とりあえず。

誤字または脱字、そして『テュエルにおけるミスなどがあれば、指摘して貰うださるとありがたいです。

では。

追記

2011.8.10

効果の勘違いによるミス。『ダスト・ショート』を『マインド・クラッシュ』に変更。
何をやつていてるんだ、自分は。

2011.8.11

カードの種類のミス。『闇の指名者』が通常魔法だったため、一部デュエルシーンを書き換えました。

……再びの大きなミス。……凹みますね。

2011.8.14

『闇の指名者』、『マインドクラッシュ』の発動タイミング、『スープル・ヴィス』の効果が発動していなかつた部分を修正。
……修正作業つて、結構精神ダメージがでかいものですね。

TURN - 05 野球対決！？ 超熱血球児（前書き）

前半はほとんどノーハルしません。ですが、遊戯王である必要あります。
ないです。

おい、デコハルしろよ。

そんな感じの、TURN - 05をプレイ。

TURN - 05 野球対決！？ 超熱血球児

月一試験も終わり、十代たちの退学騒ぎも終わった頃。

体育の授業は球技 野球となつていた。

デュエル・アカデミアはデュエルの専門学校といつてもいいのだが、高校である事にかわりはない。五教科もあれば、体育もある。つまりはそういう事。

と、いうか。個人的には十代 vs タイタンくらいは見たかった気がする。と、いうかそこを逃すと、迷宮兄弟戦も逃すわけだから、原作介入のチャンスが減る、というわけだ。

楽しければ全てよし、と考えている以上、そこには介入したかったのだが、何日に十代たちが行動するかを把握できてなかつたのがいけなかつた。……うーん。残念。

閑話休題。

とにかく、今、僕は野球をやつている。結構本気で。
なぜかといふと、体育での成績も今後に大きく関わつてくるからだ。

デュエル・アカデミアではデュエルが全て、と言つてもいいくらいなのだが、そのデュエルにおいて一番大事なデッキの強化は、購買部でのカード購入である。

そこでは、普通に金での支払いもあるのだが、もう一つ、D.P.による購入もある。

D.P.は月一テストなどでの成績によつて各生徒に与えられる。金欠の生徒たち、あるいはよりデッキを強化したいと思つている人たちがD.P.を使ってデッキを強化する、というのが一般的だ。

普段ならば月一テストでしか得られないD.P.だが、実はこの野球対決、優勝チーム全員にD.P.を与えられるという、とんでもないものだつた。

なら、やるしかないだろ！

そう言つたのは誰だつたか。月一テストで失敗し、意氣消沈していたヤツらが急に蘇つた。

普段は体育にやる気を見せないヤツらまでテンションが上がつている始末。

……なるほど、デュエルが全ての学校、といづよりデュエル至上主義者の多いこの世界においては、カードで釣る、というのは効果的な手段らしい。

話は試合に戻る。

イエロー寮 vs レッド寮の開幕戦。

9回表。バッター・ボックスに立つのは4番ピッチャーの十代。ここまで、十代一人にイエロー寮はやられてきた、と言つてい。130km/hはあるだろうストレートでイエローの生徒をキリ舞いしている。8回裏まで20奪三振。なんといふドクターキだらうか。

そして、打たれたヒットも僅か2本。四死球なし。デュエルやめて野球の道に進めよ、と思つたりもする。

しかも、だ。ここまで2打数1安打1本塁打3打点。一打席目はアウトだったものの、強烈なショートライナーだった。どんな強打者だよ、おい。

ちなみに。自分はここまで3打数1安打2盗塁。甘く入った失投を逃さずミートしてセンター前ヒット。そこから一塁へ盗塁し、キヤツチャ―である翔の弱肩を利用して二盗も決めた。

が、それが得点につながらないのがイエロークオリティ。と、いうか十代クオリティ。

数名の野球経験者と現野球部など、そこそこ運動神經のいい生徒の集まつていてるイエローであるが、それと比べてもズバ抜けているのが十代、という事だ。そもそもあのストレーートは異常だ。

イエローで一番バッティングが得意でこの試合4番ピッチャーで

先発予定だった三沢がなぜか遅刻している（アニメだと、デッキ構築してて遅刻、だったはず）ため、余計に敗戦ムードが漂っている。セカンドの守備位置でバッター ボックスにいる十代に視線を向ける。

……とにかく、この場面は絶望的だ。

そんな強打者を前に、走者がいる。確実に点を取られる。ここで

の失点は負けに直結すると言つてもいい。

万事休す。そう思つたときだった。

「待てー！ その試合待つたー！」

どうやら、我がチームの4番ピッチャーがよひやく現れたようだ。

TURN - 05

野球対決！？ 超熱血球児

結果として、イエロー寮はレッド寮に勝利した。

三沢の剛速球が十代をねじ伏せ、三沢との直接対決を望んだ十代

が「死満塁の逆転サヨナラの場面を作り出し、三沢が逃さず逆転サヨナラ満塁ホームランを放つ、という結果で。

「……」
「うか。三沢も十分におかしいヤツだ。130 km/h 近いストレートを投げるとか一般人には無理だといつの。野球部にも入つて甲子園を目指した方がいい気がする。コイツ。

そんな事を、練習の時に言つてみたら、「俺は野球よりもデュエル理論の方が大事だからな」という返事が返つて来た。全国の高校球児に謝るべきだと思う。特に投手に。

必死に練習しても最高球速が130 km/h に届かないヤツだつているんだぞ。……そう簡単に130 km/h をポンポンと投げるとか……ホント、謝れよ。マジで。

まあ、自分も人の事が言えなかつたりする。

いや、別に剛速球が投げれるとか魔球があるとかじやないけれど……まあ、こっちの世界に来る前、帰宅部で集まつて野球の練習をしまくつてた時期があつたしなあ……。懐かしいなあ……。
で、その名残で一応、野球部でもおかしくないくらいの実力は持つてゐるつもりである。

……現実味がない？……じゃあ、ギャグ補正でいいや。

そして迎えたイエロー寮の第一戦。

イエロー寮 vs ブルーセンタード。イエロー寮の先発投手は僕である。

てつきり、先発のローテーションは三沢、野球部、野球部、三沢だと思つていたのだが、イエロー寮には投手経験のある野球部がらず、なぜかは知らないが自分が適正があつたらしい。

……なんだろう。ご都合主義だらうか。そんなんだろうか。
まあ、いいや。楽しめるなら。

ちなみに、キャッチャーは三沢。……それにしても、何でも出来るやつだな、三沢。どうして空気になつてしまつたんだろう。……

いや、それは気にしてはいけない問題か？

とりあえず、サインを確認してみる。なんというか……細かい。コース指定とか初心者には無理な話なんだが。……まあ、狙える限りで狙ってはみるが。

そんな感じで、試合は始まつた。

9回裏。1対1。同点。

ブルー寮の攻撃、二死満塁。

マウンドは未だに僕。なんか満塁のピンチではあるけれど、そのどれもがエラーによるものである。つか、野球部仕事してくれ。頼むから。

バッター・ボックスにはブルー寮の4番ファースト。自称デュエルアカデミア野球部が誇る一年生スラッガー兼エース、長門大和。ここまで僕から一安打を放つている強打者。と、いうか他が全然打つてない。

唯一違うといえば、この前の月一テストでの相手、首藤だろうか。antzはなかなかやるヤツだった。

とはいって、ブルー寮の戦力は本来よりも低下している。

何故かというと、万丈目の離脱だ。数日前に行われた三沢と万丈目のデュエルにより、万丈目が退学、ブルー寮から去ってしまったからだ。

万丈目はブルー寮の4番エースといえる人材であり、身体能力は十代レベル、とはいえないまでも三沢レベルはあつたはずだ。……つまり、大黒柱をブルー寮は失っている。

もしも万丈目がブルー寮に残っていたのなら、同点ではなくビハインドだつただろ

「来あおおおい！ そこのピッチャああああああ！ そのボールを策越えしてやるぞおおおおお！」

と、心の声は一人の叫び声によつてかき消された。

その主はバッター・ボックスの長門大和。なんか、凄く熱い。どう

いう事なのだろう。出る作品が間違っている気がする。ミ フルあたりにでも出た方がいい気がする。そのキャラ。

とりあえず、サインを確認する。

打たれる可能性を考えれば敬遠をしたいが、満塁だから無理。サナラ押し出しとかやつちや駄目だ。

つまり、抑えるしかないわけだ。

僕の持ち球はフォーシームファスト、ツーシームファスト、スライダー、そしてナックルカーブだ。

だが、スライダーもナックルカーブも制球力には自信がない。変化量はそこそこのつもりだが、要求されたコースに投げれるほどの器用さはない。

そして、フォーシームもツーシームも球威があるわけじゃない。速いわけでもない。

三沢のリードを信じて投げるしか、僕には出来る事がない。

そして、三沢が出したサインを確認する。そして、テイクバックから右サイドハンドで球を放つ ！

球はインコースに向かう。ここまでバッティングはそのテンションの高さからは想像できないほど消極的な長門。ストライクゾーンのこの球を見逃す。

一球目。妥当なサイン。よって頷き、投球モーションに入る。アウトコースいっぱいにストレート。ボール球でもいいというサインだったが、ストライクゾーンギリギリに入ったようだった。どうか今日のストライクゾーンは広めだ。

流石の自称デュエルアカデミア野球部が誇る一年生スラッガーもこれには納得がいかなかつたのか、首をかしげている が、目つきがここで変わった。

ただの熱いやツかと思ったら、そうではないらしい。

……と、なるともうストライクゾーンギリギリは通用しないと見ていいだろう。

そう思つたのか、三沢もサインをまだ出していない。悩んでいる

ようだ。いくら相手の弱点をつくリードが持ち味の三沢であろうとも、このスラッガーの弱点を見つけることはできないらしい。

悩んだ末に三沢がタイムをとり、こちらに駆け寄ってきた。

「どうする、楓？……安全策はないぞ。何か隠し球とかないか？俺の手札はつきているんだ」

三沢に前に提示した僕の球種は、フォーシームファスト、ツーシームファスト、そして変化球のスライダーだ。ただし、スライダーはフォーシームとツーシームと比べると制球が甘い。

この手札を持ってしても、目の前のスラッガーに太刀打ちできな

い。
「投手交代で俺、という選択肢もあるが、それも厳しいだろうな。データじゃアイツはストレートにはめっぽう強い。それでいながら、変化球にも対応できる柔軟さもある……最強のバッターだ」

恐らく、純粹なバッティングスキルなら十代よりもあるのは確かだ。アッパースイングで豪快に打球を飛ばす十代とは違い、教科書どおりのレベルスイングでボールにバックスピンをかけ、長打を生み出す長門。

どちらが怖いかといえば、長門に決まっている。レベルスイングを極めたバッターというのは、何より崩れない。安定したバッティングをするのだ。……勝機が薄い。

それに勝つにはどうすればいいか。

「……博打しかないだろ。三沢。計算派の三沢には屈辱かもしだないけど、ここは運に全てを任せよう。実猛一球種投げる。でも、スライダーよりも制球が酷いし、しっかりと投げれる確立は凄く低い

い

「なんだ？ 言つてみてくれ」

「

「……なるほど。それはいいかもしない。最後の最後なんだ。やつてみよ」

そして、三沢はホームベースへと戻り、ミットを構えなおす。

「〃一ティングは終了か、ピッチャー？」

「……ああ、終わりだよ」

「来い」

「……言わぬくても……！」

三沢に言つた球種を投げるためには、今まで以上に集中する必要がある。成功確立は恐らく10%未満。そして、投げれたとしても打たれない保障はない。だが、他の球種よりはマシのはずだ。

投球モーションに入る。

（）アーチを掲げながら、腰の回転に肘の回転を連動させ、ボールを指で転がしながらリリースする――！

今までとは少し違う投球モーション。……だが、これこそが切り札。
（ヨーカー）

ボールはフォーシームともツーシームとも、スライダーとも違う軌道を描く。

少し山なりに、だが、スピードはフォーシームと然程変わらない。そんなボールに、長門は食いついた。山なりなフォーシーム。つまり、それは棒球だ。手元でノビズ、おじぎをするボールを打つことなど、長門には容易である。

故に、この試合で一番のスイングをここで見せる。スイングの始動する瞬間ですら、風を切り裂く音が聞えてきそうだ。

だが、残念だ。それは棒球じゃない。

成功したかどうか、この時点ではまだわからない。だけど、なんとなく確信していた。切り札を切ることに成功し、勝利した、という

長門は棒球と予測しスイングをしている。……だが、それがもしも棒球でなかつたとすれば？

ボールは長門の予測よりもおじぎをしない。いや、実際にはおじぎをしている。だが、バッターからほそつは見えない。それこそが、この切り札だ。

「まさか、こんな場面で投げれるなんて思わなかつたよ。成功率10パーセントにも満たない魔球をさ」
魔球。そう、魔球だ。……いや、実際にはそうではないのだけれど。

「フォーシームジャイロ」というものを存知だらうか。

通常のストレート、フォーシームファストとは違い、バックスピンではなく銃弾のように回転軸がホームベースを向く、極めて特殊な球種である。

バックスピンとは違ひ回転軸がホームベースを向いたこの球は空気抵抗が少ない。よつて、手元で減速しない。

フォーシームとは違ひバックスピンではないため、重力には逆らえないものの、減速しない事によつて本来よりも落下しないつまり、バッターの予測よりも落下しない、というわけだ。

故に投球モーションは通常とは変えざるを得ない。さらに、リリースの瞬間は他の球種と比べても極めて特殊であり、コツを掴む事さえ厳しい。

だけど、僕には投げる事ができる。成功率こそ低いし、改善される気配はない。だが、これで十分だ。

目の前では、長門のバットが空を切り、ボールはミットに収まっていた。

「なんか、熱い場面だつたから忘れてたけど、引き分けの場合はどうするんですか、先生？」

試合終了後。延長戦はなし、と言っていたものの、引き分け時については聞いてなかつた。それに真つ先に気づいた三沢が体育の先生に聞いた。

「……ここはデュエルアカデミアだ。……あとはわかるな？ 各チームの先発投手を代表としたデュエルをし、勝つ方がこの試合の勝者とする！」

「なんだつてー！？ なるほど。これがデュエル至上主義か。

……なんでもありだな、おい。

「と、言つことは俺とお前だな！　えーと確か、玄咲楓　だつた
な？」

「ああ、そうだよ」

「噂は聞いている。そこそこやるようだな。だが、こつちはオベリ
スク・ブルーだ。ブルーだから強いとは言わんが、それなりに実績
を積んでいるつもりだ。勝たすつもりは毛頭ない。どちらが強いか
デュエルで決めよう！」

「……なるほど。他とは違うな。オーケイ。でも、勝つのは僕だか
らな！」

そして、デュエルディスクが互いに渡される。デッキもロッカー
から持ち出し、セットする。

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓　LP4000
長門大和　LP4000

「先攻後攻は野球の試合の逆　つまりブルー寮の長門から始めろ
！」

体育の教師がそう言つと、目の前の男、長門は口元をニヤリとし
て、右手の指をデッキへと向ける。

「それじゃ、まず、俺のターン！　ドロオオオオオオオ！」

大音量のドロー宣言。別に大声を出してもそうでなくとも引く力
ードは変わらない。だが、目の前のこの男は声を出せば出すほどい
い引きをしそうだ　そんな感じがする、ドロー宣言だった。

「フツ！　引いたぜええええ！　俺のキーカードをなああああ
ああつ！！！」

「……叫ぶのはいいから、進行してくれ。長引くだろ」

「おつとやうだつた。それじゃ、俺は手札より『UFOタートル』を攻撃表示で召喚！」

UFOタートル

ATK1400 DEF1200

現れるのはまるでUFOのよつたな甲羅　　のようなナーフ　　を
背負う^{タートル}亀。

炎族のリクルーター。リクルートの範囲が広く、レベル1～4までのチューナーを始めてリクルート可能にした初のリクルーターらしい。まあ、この世界にはまだシンクロはないから関係はないけど。とにかく、これが目の前にいるといつ事は、相手は炎属性をメインとしたデッキなのだろう。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！」

引きはそこそこ。可もなく不可もなく、といったところか。

欲を言えば　　折角だから、こいついう場面でワンターンキルとかしてみたかったが……まあ、仕方ないか。

「『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚！」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

とりあえず、初手は最近引く確率の高い『ダーク・ヴァルキリア』だ。ほとんどのデュエルでこのカードを引いている気がする。まあ、何度もやっていたら、そんな時期もあるか。

「バトル！　『ダーク・ヴァルキリア』で『UFOタートル』を攻撃！」

攻撃力の差、400ポイント。白い奔流があつといつまに『UFOタートル』を包み込み、粉碎する。

長門大和 L P 3 6 0 0

ひとまず、先制には成功した、といったところか。だが、わずか400ポイント。かすり傷に等しい。

「『UFOターチル』の効果！ 戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを特殊召喚する！ 僕は一枚目の『UFOターチル』を攻撃表示で召喚するぜ！」

そして、現れる二体目の『UFOターチル』。噂によると空を飛べるらしいのだが、地に足がきちんとついている。デマ情報だったのだろうか。まあ、どうでもいいけれど。

「僕はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

とりあえず、次のターンに備え、カードを伏せておく。

「俺のターン、ドロー！ ……ま、実はもう既に準備は整っていたりするんだぜええつ！」

「…………？」

「俺は手札から『天使の施し』を発動、カードを3枚ドローして、2枚捨てるぜ！ そして、手札から『死者蘇生』を発動！ 『超熱血球児』を攻撃表示で特殊召喚するぜええええつ…………！」

なんという大音量。なんという騒音。そんな宣言で、目の前に現れるのは、バットを持った少年。

超熱血球児

ATK500 DEF1000

ATK500 DEF1500

フィールドに存在する炎属性モンスターの数×1000ポイント攻撃力が上昇する下級ながら火力のあるモンスター。だが、この力ードを除くと『UFOターチル』しか炎属性はないため、攻撃力

は1500だ。

何をするつもりだ？ と、思ったその時、長門が手札からもう一枚のカードをディスクにセットした。

「そしてえつ！ 手札より速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動するうつ！！」

その瞬間。背筋が冷えた。

「相手フィールド上に表側表示のモンスターがいて、攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に発動できる速攻魔法！ 俺は召喚したモンスターと同名モンスターを手札、デッキ、墓地から全て攻撃表示でとく召喚し、相手は存在するモンスターを選択し、これも全て特殊召喚するカードだぜええつ！」

今、長門が召喚したのは『超熱血球児』、と、言つことは

「俺は『超熱血球児』を特殊召喚するぜええええつ！」

「……僕は『ダーク・ヴァルキリア』を1体、守備表示で特殊召喚する」

「その様子だと、気づいたみたいじゃねえか！ いいねえ！ 最高だよ！」

「どうせ。じつからすりや、最悪の状況なんだけど」

「そりやそりや！ これは俺の作戦なんだからな！ 『超熱血球児』の効果！ 自身以外の炎属性モンスターの数×1000ポイント攻撃力を上げる！ 合計3000ポイント攻撃力が上がるぜええええ！」

「！」

超熱血球児

ATK500 ATK3500

と、いうか冷静に考えて、『ブルーアイス・ホワイトドラゴン』よりも攻撃力の高い球児って凄い気がする。流石口ミの野球人。パワフルだなあ……。つて、現実逃避している場合ではない。

「バトル！『超熱血球児』で『ダーク・ヴァルキリア』に攻撃いい！“ソニックスイング”ううつ！」

あ、あれは！？パワーロフのサクセスモード（広島）にて人間を壠越えする事のできる超音速スイング、“ソニックスイング”だとおお！？

……なんて叫んだりはしないけど、どうしてもツッコみたい。うん、もうパロジヤねえか。

目の前で『ダーク・ヴァルキリア』がスイングをくらつて吹き飛んでた。よかつた。コメティな方で。リアルスイングだつたら、どこのウツイだもんな。KOしになつちまうもんな。

……あれ？伏字が多い気がする。

つて、『ダーク・ヴァルキリア』さん。なんでこっち睨んでんですか。なんか怖いんですけど。……あ、消えた。……背筋が冷えたんだけ……。

……いや、そんな場合ではない。

攻撃力3500の攻撃を攻撃力1800の『ダーク・ヴァルキリア』で受けたつまり、1700ポイントのダメージ。結構痛手だ。

玄咲楓 LP2300

「続いてえええ！『UFOタートル』で守備表示の『ダーク・ヴァルキリア』を粉碎するうううつ！」

『UFOタートル』が『ダーク・ヴァルキリア』に向かつて突進し、『ダーク・ヴァルキリア』が粉碎される。

……よかつた。こつちは怖くなかった。つて、よくない！伏せカードを除けば場は空なんだよ！

「そしてええつ！とどめだあ！！『超熱血球児』一体でダイレクトアタック！“ソニックスイング”ううつ！」

……このままだと敗北だ。でも、こつちには伏せカードがある！

「つ！ リバースカードオープン！ 罷カード『ガード・ブロック』を一枚発動！ 戰闘ダメージをゼロにして、カードを一枚発動したから、一枚ドローする！」

「……防いだか。やるじやねえかああつ！」

「それほどでも」

「だが、勝つのは俺だ！ このままターンエンドだぜえええつ！」相手フィールドには攻撃力3500の『超熱血球児』が3体と『UFOタートル』。

自分のフィールドはがら空き。勝機は薄い。

でも、やってみようじゃないか。逆転劇というものを――！

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは、と――！ これなら、行ける――！

「……なあ、長門」

「何だ？」

「僕の勝ちだ」

「いいぜ。できるものなら、やってみやがれってんだあああつ！」

「！」

手札にはキーカードが揃っている。あとはやれるだけやるだけだ！
「僕は手札より『天使の施し』を発動し、3枚ドローして2枚を捨てる。そして、手札より魔法カード『思い出のプラン』を発動！ 墓地より『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚する！』

再び現れる『ダーク・ヴァルキリア』。何気に出番が多い気がする。

「さりに、装備魔法『スペル・ヴィス』を発動し、『ダーク・ヴァルキリア』に装備。再召喚された状態となつた『ダーク・ヴァルキリア』の効果！ 魔力カウンターを一つのせ、それを取り除く事で相手モンスター1体を破壊する！ 『UFOタートル』を破壊！」

超熱血球児

ATK3500 DEF2500

とりあえず、1体。リクルーターは戦闘破壊する限りリクルートされてしまうから、効果で破壊するに限る。

さらに、炎属性のモンスターが減った事で『超熱血球児』の攻撃力は減少する。

「まだまだ続くぞ！ 手札より速攻魔法『サイクロン』発動！ 『スペル・ヴィス』を破壊し、墓地に送られた『スペル・ヴィス』の効果で墓地より『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「来たか……！ それがお前のエースモンスターか……だが、俺の『超熱血球児』には及ばねえぜ！」

「まだだ。『ダーク・ヴァルキリア』を通常召喚権を使って再召喚！ 効果により魔力カウンターをのせ、取り除く事で『超熱血球児』を破壊する！」

「ち、その効果があつたか！ やるじやねえかああああつ！」

超熱血球児

ATK2500 ATK1500

「ここまで来れば、あともう一息だ。さて、決めるぞ……！」

「さらにつ！ 手札より魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地より2枚目の『真紅眼の黒竜』を召喚する…」

これで、準備は完了だ。

「バトル！ 『ダーク・ヴァルキリア』で『超熱血球児』、『真紅眼の黒竜』2体でダイレクトアタック！」

累計ダメージ、5100ポイント。たとえライフポイントが初期値だったとしても、削り切れるほどのダメージだった。

長門大和 LPO（1500のオーバーキル）

「俺の、負けか……やるじゃねえか……っ！」

「……そう言つてもらえるなら、ありがたい」

「デュエル終了！ この勝負、イエロー寮代表玄咲楓の勝利により、この試合勝者は、イエロー寮だ！」

教師のその宣言により、イエロー寮全員が湧く。テンションが上がってるな、俺もみんなも。

だが、僕がこの時戦つた長門を見たのはこの日が最初で最後だった。

これは後で聞いた話なのだが、長門は冬休みになる前に転校したらしい。退学した万丈目よろしく、いきなり帰ったとの事だった。噂によれば、長門は野球強豪校に転校したとの事だった。だが、帰る直前の長門の顔は明るくはなかつたらしい。

デュエルは娯楽だ。だけど、それに十分な気合を入れている人間はこの世界には多い。

つまり、デュエルに十分な気合を入れていて、それを折られた、という事なのだろうか。

僕は現実世界との相違点に、まだついてゆけずについた。

おまけ

「今回の最強カードは『天使の施し』だ。3枚ドローした後、2枚を墓地に送る。メリットしかないカードで、現実世界じゃ禁止カードだぞ！」

「GXの世界じゃ、まだまだ現役。第一期中盤にてプロのデュエリストが使用していたのが確認できる」

TURN - 05 野球対決！？ 超熱血球児（後書き）

遅れています。どうも、YBFです。

野球部分は野球小説のリメイクをしようという考え方もあり、そのリハビリのつもりで書いたのですが 駄目だ、大分感覚が失われている気がする。

……うーん。改善の余地アリ、ですね。

と、いうか『地獄の暴走召喚』の効果を思いつきワニスしてました。最初。

通常召喚でも効果発動できる気でいました。……あぶねえ……。
故に、『天使の施し』で強引に墓地肥やし、『死者蘇生』で強引に蘇生、とかなり強引さが出てます。

……なんか、かなり急ぎ足で執筆したので、ミスが多くそうだなあ……。

あと、次回の更新も執筆してからの投稿になります。

ストックはあるのですが、挿入できそうな話が思いついたので。

……こんな事だから、色々とだめなんだろうなあ……。

とりあえず。

誤字脱字、その他のミスがあれば指摘をどうぞ。

積極的に直していくつもりでいます。

では。

追記

2011・9・21 一部、火属性となっていた部分を炎属性に訂

正。

—TURN - 06 過去と遭遇ー? 極V.S遊戯トチキ(前編)(前書き)

前回の後書きで書いた事とは違い、結局ストックを浪費する事分。では、本編をどうつない。

気づけば、四度目の月一試験を終えていた。
なんか、ほかにもイベントがあつたような気がしたのだが、それはもう既に過ぎ去つていたらしい。

うん、SALの話とか。SALの話とか。

-あれ？ あと、何があつたつけ？ よく思い出せない。

……まあ、とりあえず、二度目の月一試験、実技試験は、もう一度オベリスク・ブルーとデュエルする事になった。

前回、僕がオベリスク・ブルーに勝ち、寮入れ替えデュエルでも三沢が万丈目に勝利した事から、ラー・イエローの生徒で希望すればオベリスク・ブルーとのデュエルをすることができるようになつた。

僕ら二人が勝つことから、自分の実力に自信を持つ何人かがオベリスク・ブルーに挑んでいた。
そのおよそ半数以上が負けていたものの、僕と三沢はほぼパーフェクトで勝利。

よくわからないチートドローにより、初期手札が凄いことになつた以上、負けるのはありえなかつたのだけども。と、いうか相手もよくわからない、という感じだろう。

一言ほど言わせてもらうなら、『ダーク・ヴァルキリア』さんマジパネエツす。モンスター除去おいしいです。だろうか。あ、『スペル・ヴィス』もおいしかつたですよ？

……なんか、【デュアル】使いになつているような気がしないでもない。

いや、だつたら『炎妖蝶ウイルプス』とか積んだ方がいいのかな。

……今度、パックで当てれたら検討してみよう。

ああ、そうだ。

こつちの世界に来てから、何度かパックを買ってみている。

主にあたつたのは何故か“靈使い”シリーズだつた。……使つたことないんだよな、“靈使い”。今度、デッキ組んでみよつかな。……使いこなせる気がしないけれども。

まあ、カードはあるから今度作るわ。うん。今度。とりあえず、僕は今日もパックを買おうと思って、購買部に向かつた。

そこで、目にしたのは

“初代デュエルキング、武藤遊戯DECK特別展示！”

これ以上、イベント介入のチャンスを逃したくない僕は、整理券をさつと手に入れ、次なる介入に備える事にした。

TURN - 07

伝説と遭遇！？ 楓VS遊戯デッキ（前編）

整理券を入手してしばらく経った後、再び購買部に向かってみると、アニメ通り、翔と神楽坂がデュエルをしていた。

「お、三沢。いたのか」

「ああ。なかなか見所あるデュエルになつてゐるからな」

目の前に繰り広げられているのは、アニメで見たものよりも少し前の時点。

うーむ。少し、神楽坂が押している?

「丸藤翔と神楽坂のデュエルか。翔はともかくとして、神楽坂はそれなりの実力者だったよな、三沢?」

「ああ。どうしてもコピー・デッキになる、という問題はさておき、そのデッキを本人のように扱う事のできるデッキ解析力の高さはデュエル・アカデミアでも上位のものだろうしな」

「で、今回は……クロノス先生の【古代の機械】か。……なかなか難しそうなチョイスだな。まあ、ハマれば強いという強みはあるのは認めるが」

「そうだな。特に【古代の機械】のHースモンスター、『古代の機械巨人』^{ギアゴーレム}が特殊召喚できない、というのが大きいな」

「……まあ、それでも十分強いのが【古代の機械】なんだよな」

自分は【古代の機械】を作つた事はないが、確か現実世界の時に友達が「このデッキはうまく回れば十分に強いぜ」と言つていた。まあ、でもこの世界だと『古代の機械巨人』の効果が現実世界と違うから、少々弱体化している、といえるのだが。

「で、翔のデュエルはどんな感じなんだ?」

「うん。そうだな。カードの引きが少々良い、と言つたところか。そうでなければ、もう既に勝負が決まつっていた場面があつた」

ふむ。なるほど。メインキャラクター補正、というヤツか。

そして、そこから一進一退。徐々に徐々にお互いのライフポイントが削れて行く。うん、なかなかにいいデュエルである。

「お、何だ? 何の騒ぎだ ケンカか? ん? 何だ?」

と、ここで十代が登場。

ケンカといふ言葉について三沢が苦笑する。

「誰だあれ？」

「神楽坂。ラーライエローの生徒で……」

「見りやわかるつて。だから、何を　　ん？　翔？」

「アニキ！」

「どうしたんだ？　翔？」

十代が、人ごみをわけで翔の下へと向かう。
うん、それにあわせて人ごみが少し動いていのつて、空氣でも
読んだのだろうか。……まあ、どうでもいいか。

「どうもこうもないッスよ。アレアレ！」

そういうつて、翔が指差した先を十代は注視する。

「デュエルアカデミアにて初代デュエルキング武藤遊戯のデッキ特別展示　て、事は！　遊戯さんが使っていたデッキが、この学園に来るのかあ！」

「これはもう、見るしかないでしょ！　　アニキ？」

十代は先ほどの文章を凝視し、心こゝにあらずといった感じになつていた。

そんなこんなで、デュエルが再開され、翔がアニメどおりに勝利を収めた。

……それにもしても、翔つて、魔法カードや罫カードは結構本格的なものを持っているよな。『魔法の筒』とか、その他諸々……。うん、知識と度胸さえつけば強いんじやないか、普通に。

そして、見物客は散つていく。神楽坂の陰口を叩きながら。

どうして、そうなるのだろうか。まあ、コピーデッキの印象が悪いといつうのはよくわかる。理論だけ、といわれるのもわかる。……だが、そこまで言つ事なのか？

「ドンマイ。ま、ついてない時もあるさ」

「そろそろ。とりあえず、この負けを次に活かすしかないだろ？」
「うでないと」

「うるさい！ こつだつてオベリスク・ブルーにいけるお前たちに何がわかる！」

そう言って、神楽坂はその場を去つて行つた。

そして、夜。

三沢に誘われて、僕は夜中に展示会場に向かつ事にした。展示会場手前では、同じく一足先に見よつとした十代たちと合流した。

「お、十代」

「三沢、楓、どうしたんだ？」

「あつはははは。ちよつとフライングしてキングのチッキを拝みにね」

「ま。そんなところや。整理券があるとはいへ、当口は混みそだからな」

「なんだ、みんな考えること同じ同じか」

と、十代が言つたその直後、「マンマリーヤー！」といつ悲鳴が響き渡つた。

「何だ今の一？」

「あの声はー？」

「クロノス教諭だ！」

……まあ、“マンマリーヤー”の時点まで特定できるみな……。

「十代、玄咲！」

「おう！」

「そうだな！」

僕らは展示場へ走り、扉を開けるとそこにはクロノス教諭と割れたガラスケースがあつた。

「クロノス教諭！」

「展示ケースが！」

「キングのデッキがないだな！」

「まさかクロノス先生が！？」

「ギクーン！ ノンノンノン！」

いや、アンタ犯人じゃないだろ？」。

「みんなに知らせようぜ！」

と、十代たちが外に出ようとした時
「ちょっと待ってテスー！」

と、クロノス先生がタックルをかました。え？ 僕？ ちゃ

んと避けたよ？

「何すんだよ！？」

「事が公になると、私が責任とらされるノーネ！」

「だったら早く！」

「そうだぞ。校長に知れたら……」

「もしかしたら免職かも」

「だから違うノーネ！ 私じやないノーネ！ ないノーネ……」
とにかく必死なクロノス先生。まあ、必死だよな。この世界じゃ
武藤遊戯はもはや現人神のように扱われている部分もあるからなあ
……。

「んな事最初からわかってるよ

「ネ？」

「先生ならガラスケース割る必要ないだろ？」

「普通、ケースの鍵くらいもつていそうですしね」

と、十代の台詞に付け加えてみる。それにしても、立っているのが僕だけってのもなかなかにシユールだなあ……。空気を読んで、
僕も倒れるべきだったのかな？

「そうナーネ。ガラスケースの鍵あるノーネ」

「まだ時間は経っていない。犯人を見つけ出すんだ！」

「うん！」

全員がうなずき、立ち上がる。

「ドロップアウトボーイ、シニヨールたちだけが頼りナーネ！」

「行くぞ！ 翔、隼人、楓！」

「俺もいるぞ！」

あ。三沢空氣フラグキタコレ。

「うわあー！」

翔の悲鳴が聞こえた。アニメでの犯人 神楽坂の居場所を把握し切れていない以上、見つけられなかつたが、声の方向からして近い、というのがわかつた。

……多分、この方向。あの崖か。

そう思つて、僕は駆ける。多分、翔の声に気づいて、十代たちもそこへと向かうだろ。う。

とにかく、ここが僕の介入どころだ。

十代には渡さない。

崖にたどり着くと、そこには倒れている翔と、高笑いしている神楽坂がいた。

「翔、大丈夫か？」

「ぐ、玄咲くん……悔しいよ……あいつが」

そう言つて、翔が見た方向には、仁王立ちした神楽坂。

「神楽坂……お前がデッキを奪つたのか？ それなら、今すぐ返せ。この事が公にならなつていない今なら、大事にならぬかもしないぞ？」

「フン。嫌だと言つたら？」

「何？」

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ。俺なら、武藤遊戯のデュエルも徹底的に研究している俺なら！ 彼のデュエルを100パーセント再現できる！ もう俺は誰にも負けない！ クロノスだろうが、カイザーだろうが、誰にも！」

……そもそも、誰かのデッキを奪つて使つている時点で、そんな事はありえない。

まあ、強いデッキのローテーションは、確かに強い。【ライトロード】あたりはその典型のように思える。

誰が作っても、大体似たようなデッキレシピになる。そして、ある一定の強さを保証する。

だけど、それを使っているうちは、強くなれない。事実、僕たつて最初は【ライトロード】を使って、デュエルに勝つて満足していた。

でも、それだけだ。“ライトロード”と名のついたモンスターをある程度入れてさえいれば、デッキの構成力をあまり問わないし、農カードも特に使わず力押しで勝てる時が大半。

そして、その強さに満足し、デッキに改良を加えない。それで強くなれるわけがない。

強いデュエリストというのは、自分でデッキの構成を考え、作戦を考え、どういう意図を持つてそのカードを入れるかを吟味しなければならない。

だから。誰かが使っていて、強いとわかっているデッキを使うだなんて、そんなのは強い人間のする事ではない。故に 神楽坂は、弱い。

「翔。デュエルディスクを貸してくれ

「え？」

「そのデッキがあれば、誰にも負けない？ そうかよ。なら、僕とデュエルしろ。神楽坂、お前が勝てば僕は見逃してやる。でも、僕が勝つたら、潔くデッキは返せ。それでいいだろ？」「..」

「本当に俺に勝つ気がるのか？」

「ああ。負けるつもりなんて、最初からない

「いいだろう。相手をしてやる

「玄咲くん！」

翔がデュエルディスクを投げ、僕はそれを受け取り装着する。そして、ベルトについているデッキホルダーからデッキを取り出し、それをセットする。

「デュエル！」

「デュエル！」

玄咲楓

L P 4 0 0 0

神楽坂

L P 4 0 0 0

「先攻は譲つてやるよ、玄咲」

「あ、そ。なら遠慮なく……僕のターン、ドロー！」

初期手札は、まあまあと言つたところか。とりあえず、安全策くらいはとれる。

「僕はモンスターをセット、カードをセットしてターンエンド！」

「ふん、それだけか！？ 僕のターン、ドロー！ 『幻獣王ガゼル』と『バフオメット』を手札融合！ 出でよ、『有翼幻獣キマイラ』！」

有翼幻獣キマイラ

A T K 2 1 0 0 D E F 1 8 0 0

田の前に現れるのは、翼を持つ、双頭の幻獣。

正直、僕からすればあまり強く見えない。それに、ステータスもそこそこと行つたところか。

「行け、『キマイラ』！ モンスターに攻撃！ “インパクト・ダ

ッショ”！」

「セツトモンスターは『仮面竜』だ」

仮面竜

A T K 1 4 0 0 D E F 1 1 0 0

独特の形状をした小型のドラゴン、『仮面竜』の防御力はわずか1100ポイント。攻撃力2100の『有翼幻獣キマイラ』の攻撃には、耐えられず、すぐに破壊される。

「破壊され、墓地に送られた『仮面竜』の効果を発動する

さて、ここにどうするかだ。テック圧縮を行つたか、攻勢に転じるか。

よし、後者だ。

「攻撃力1500以下のモンスター……『黒竜の雛』を守備表示で特殊召喚する！」

黒竜の雛

ATK800 DEF400

それにして、いつもすまない『仮面竜』。

「ターンエンドだ」

……と、神楽坂が、エンドの宣言を行つた時。よつやく十代たちが現れた。

「楓！」

「玄咲！」

翔の悲鳴で駆けつけたが、僕のほうが速かった、というわけか。

「まさか、犯人はお前だったのか、神楽坂！？」

そう言つたのは、三沢。同じラー・イエローとして、あの場で神楽坂を励ましたうちの一人として、今回の行動は予想外かつ、許せないものだと思ったらしい。

「ああ、そうさ三沢！ 武藤遊戯を徹底的に研究した俺ならこのデッキさえあれば最強になれる……！ 強くなれる手段を使わないで、どうする！？」

そして、三沢の問いに対し、堂々と答える神楽坂。

駄目だ。大分壊れている。

そんなことをしても、強くなれるわけじゃない。
だから、わからせなければ。

介入してしまった以上、十代がやつたことを、代わりに僕がしなければ……！

「僕のターン、ドロー！ 『黒竜の雛』を墓地に送ることで、手札

の『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する！』

『黒竜の雛』が大きくなり、目の前に『真紅眼の黒竜』へと成長する。鋭利なその姿はやはりいつ見てもかっこいいものだ。

真紅眼の黒竜

ATK2400 DEF2000

「玄咲君のエースモンスターっス！」

「これで『有翼幻獣キマイラ』の攻撃力を上回つたんだな！」

「さりに、『ダーク・グレファー』を守備表示で召喚し、効果を発動！ 手札の『真紅眼の黒竜』を捨て、デッキから『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送る」

ダーク・グレファー

ATK1700 DEF1600

「バトル。『真紅眼の黒竜』で『有翼幻獣キマイラ』を攻撃！ “黒炎弾”！」

攻撃力2400ポイントの『真紅眼の黒竜』であれば、攻撃力2100の『有翼幻獣キマイラ』を倒すには十分。

『真紅眼の黒竜』が放つた黒い炎を浴びた『有翼幻獣キマイラ』は為すすべもなく破壊される。

神楽坂 LP3700

「チイツ！ だが、このカードが破壊されたとき、墓地にある“ガゼル”か『バフオメット』を特殊召喚できる－ 蘇れ！ „バフオメット“！」

バフォメット

ATK1400 DEF1800

この効果さえなれば、先ほど出した『ダーク・グレファー』は攻撃表示で出したし、そうすればダイレクトアタックできた。だが、『ダーク・グレファー』の攻撃力1700を超える守備力1800を持つ『バフォメット』を出されてしまった。

これでは、攻めきれない。

「僕はこのまま、ターンエンド……！」

「俺のターン。手札から『死者転生』を発動！ このカードは手札を一枚捨て、墓地のモンスター一体を手札に加える。墓地より『幻獣王ガゼル』を手札に加え、守備表示で召喚！さらに手札より魔法カード『光の護封剣』を発動する！」

幻獣王ガゼル

ATK1500 DEF1200

その瞬間、天空より無数もの光り輝く剣が降り注ぎ、『真紅眼の黒竜』と『ダーク・グレファー』を取り囲む。

『光の護封剣』。三ターンの間、相手の攻撃を封じる永続魔法。このカードがある限り、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。

「僕のターン、ドロー」

そして、『光の護封剣』を除去できるカードも今は手札にない。

ここは、特に動く必要もないな。

「僕はこのまま、ターンエンド」

「攻撃できないから、何もしないか。フン、甘いな。俺のターン、ドロー。フ、来たな。俺は手札より『死者蘇生』を発動！ 墓地より蘇れ！ 『ブラック・マジシャン』！」

ブラック・マジシャン

ATK2500 DEF2000

「何!? 墓地にあるのは『有翼幻獣キマイラ』だけのはずだ!」
十代がそう叫ぶ。だが、違う。

「……いや、十代。思い出してみる。そのタイミングはあった。
つい、さつきな

「何だつて?」

「どうやら、お前は気づいているようだな。お前の考えていることは正しげだ。『死者転生』の時に、墓地に送っていたのぞ」

そう、そのタイミングで墓地に送ることができた。そして、今、墓地から特殊召喚するためのキーカードである『死者蘇生』を引いたのだろう。

「そして、手札より『千本ナイフ』を発動。このカードは自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する時、相手モンスター一体を破壊! 僕は『ダーク・グレファー』を破壊!」

虚空より何本ものナイフ カード名にあるとおり、千本かもしれないが が現れ、『ブラック・マジシャン』の命図とともに『ダーク・グレファー』に迫り、為す術もなく破壊される。

「ちつ……」

「そして、『バフォメット』と『幻獣王ガゼル』を攻撃表示に変更し、バトル! 『ブラック・マジシャン』で『真紅眼の黒竜』を攻撃!

“ブラック・マジック”!

攻撃力2500ポイント。その攻撃力は『真紅眼の黒竜』を若干上回る。伏せカードを使えば、その攻撃を防ぐことはできる。……だが、それは更なるピンチに使うべきだ。ここで使うべきじやない。『ブラックマジシャン』の放った漆黒の奔流にのまれ、鋭利な身体はそれに耐え切れず、爆発した。

すまない、『真紅眼の黒竜』。だが、必ず勝つてみせる……！

「そして、『バフオメット』と『幻獣王ガゼル』でダイレクトアタック！」

一頭の幻獣が迫つてくる。攻撃力1500と1400の攻撃。合計、2900ポイント……！！

玄咲楓 LP1000

「チイツ……！」

これで、ライフポイントは1000ポイントのみ。ここからは一つのプレイミスも許されない。

「貴様程度の『デュエリスト』が俺に勝とうなんて、千年早いぜくそ、かつこつけやがって……！」

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードじゃ、この状況は打開できない。今できるのは、耐えることだけだ。

「モンスターをセットして、ターンエンドだ」

「フ、守つてばかりか？ ならこちらから攻めさせてもらおう！ 俺のターン、ドロー。バトル！ 『ブラック・マジシャン』でセットモンスターを攻撃！ “ブラック・マジック”！」

「セットモンスターは『仮面竜』だ……！」

仮面竜

ATK1400 DEF1100

あつという間に破壊される。……なんか、『仮面竜』つていつもこんな感じがする。……なんか、ごめん。

「『仮面竜』の効果！ デッキより『仮面竜』を守備表示で特殊召喚する！」

「ぐ、小賢しい……！ ならば、『バフォメット』で攻撃！」

「『仮面竜』の効果で『テッキ』より『ボマー・ドラゴン』を守備表示で特殊召喚する」

ボマー・ドラゴン

ATK1000 DEF0

「ち、厄介なモンスターを……！」

「流石に、コイツの効果くらいは知ってるか。流石、『コピー』『デッカ』だ。カードには詳しくないと話にならないもんな」

「『コピー』、『コピー』というな！ これが俺の実力だ！ 玄咲！」

田の前の神楽坂が叫んだ。

「いつだってそうだ……！ 俺の戦術をいつも『コピー』だのなんだのいつもいつも貶しやがって……！ だけば、この『テッキ』でこれこそが俺の実力だと認めさせてやる……！」

神楽坂の鋭い視線が、こちらへと突き刺さる。

よほど、暗いものを背負っている、というのが伝わってくる。

じゃあ、僕は？

僕には暗いものなんて特になし。あつたとしても、人並み程度だろ？ そんな僕が、神楽坂に軽々しく何かを言えるだろ？ いや、言えはしない。

神楽坂は所詮、アニメの中の登場人物だ。十代も、翔也も、三沢も。そんな彼らがどうなるうと、僕には関係のないことだ。

でも、田の前に彼らはいる。

じゃあ、これは紛れもない事実。僕にとつての新たな現実なのではないか？

……なら。

「お前がそこまでいうなら、それでもいいさ。でもさ、一つだけ言ってやる」

僕は今まで通り、自由気ままにやらせてもらつた。僕はいつも

てそうしてきた。

アニメの世界だから、なんてのは関係ない。

ただ、僕は楽しむためだけに選択肢を決めさせてもらひ……！

「僕が勝つたら、それは間違つてた。ということになるだろ、それ。だから、証明してやるよ。お前の考えが、間違つてるってね！」

本気でぶつかってやる。全力で向かってやる。

「フ、そんな事は不可能だ。今の俺のデッキは、最強のデッキだからな！ 僕はカード一枚伏せ、ターン終了だ！」

「最強無敵のデッキなぞ、あるもんか……！ 僕のターン、ドロー！」

来た。とりあえず、このカードなら、この状況を開拓できる……！

「手札より魔法カード『天使の施し』を発動！ 三枚ドローし、その後一枚捨てる」

引いたカードは、なかなかのもの。元々の手札から一枚、新たに引いたカードのうち一枚を捨てる。

これで、準備は完了だ。

「手札より『思い出のブランク』を発動！ 墓地より通常モンスターを特殊召喚する！」

「『真紅眼の黒竜』を蘇生するつもりか？ だが、それでは『ブラック・マジシャン』を超えることはできないぞ？」

「慌てるな。それ以外にも僕は墓地に通常モンスターを墓地に送っている。……そう、『天使の施し』で。墓地より、『ヘルカイザー・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！』

ヘルカイザー・ドラゴン

ATK2400 DEF1500

「そして、装備魔法『スーパーベル・ヴィス』を発動し、『ヘルカイザー・ドラゴン』に装備。そして、手札より速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動！ 自分の場の『スーパーベル・ヴィス』とお前の場の

『光の護封剣』を選択し、破壊する…

「これで玄咲くんも攻撃ができるようになつたつす…」
「行け！ 楓えつ！」

「そして、破壊され墓地に送られた『スーザン・ヴィス』の効果で墓地より通常モンスター、『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚する…」

ダーク・ヴァルキリア

ATK1800 DEF1050

「さりに、『ヘルカイザー・ドラゴン』を再度召喚する。これにより、『ヘルカイザー・ドラゴン』は一度のバトルフェイズで一度の攻撃ができるようになる…」

「チイツ…」

「『ボマー・ドラゴン』を攻撃表示に変更し、バトル！ 『ボマー・ドラゴン』で『ブラック・マジシャン』を攻撃！」

攻撃力では劣る『ボマー・ドラゴン』だが、散り際に爆弾を投下し、『ブラック・マジシャン』を道連れにしようとする。

「だが、爪が甘いな、玄咲！ バトルフェイズに入る前にリバースカードオープン！ 速攻魔法『光と闇の洗礼』を発動！」

「……そ、そのカードは……！」

そういえば、そんなカードもあつた。

『光と闇の洗礼』このカードによつて、呼び出されるモンスターは……！

「このカードは、自分の場の『ブラックマジシャン』を生贊に自分の手札、墓地、デッキの中から、『混沌の黒魔術師』を召喚する！」
目の前で、『ブラックマジシャン』が何かに吸い込まれてゆき、それが光つたかと思えば、その中から漆黒の魔術師が現れた。

それこそが、『混沌の黒魔術師』。『ブラックマジシャン』を超える魔法使い族モンスター。

混沌の黒魔術師

ATK2800 DEF2600

それが、僕の目の前に、立ちはだかつたのだった。

To be continued . . .

ストックがもうほとんど残ってません。どうしましょ。う。

とりあえず、ストックがなくなったら更新停止する予定です。一応、受験生だし。

え？ 受験生ならそんなことせずに勉強しない？ ……すいません。

とりあえず。

誤字脱字、その他のミスがあれば指摘をビアド。

積極的に直していくつもりでいます。

では。

追記

2011・10・10 尚、次回更新時にタイトルを変更しようと
思っています。お気に入り登録している人は注意して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0243u/>

遊戯王GX二次創作小説 現実 GXモノ（現在無題）

2011年10月10日03時15分発行